

60021

教科書文庫

6
300
34-1950
01304 49988

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

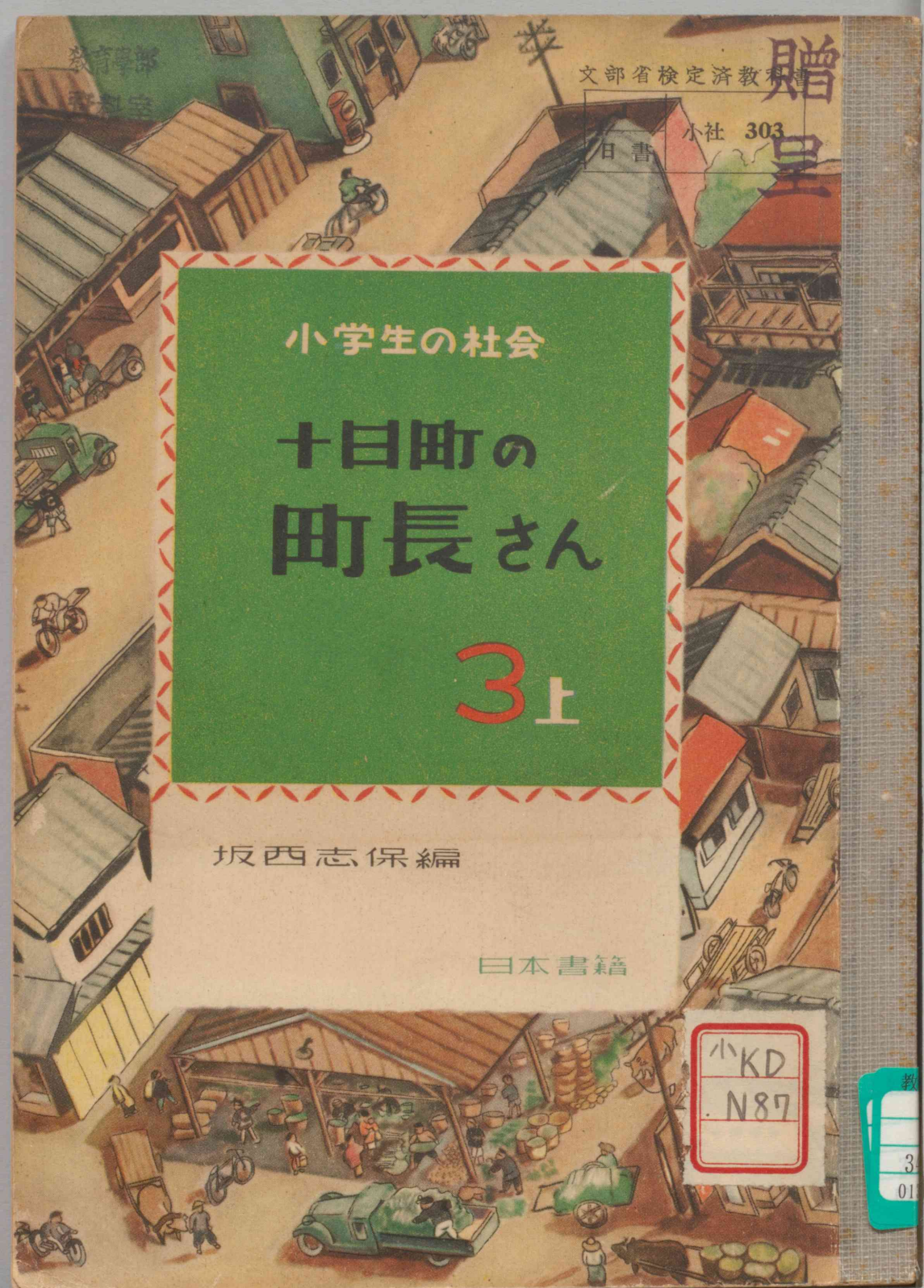
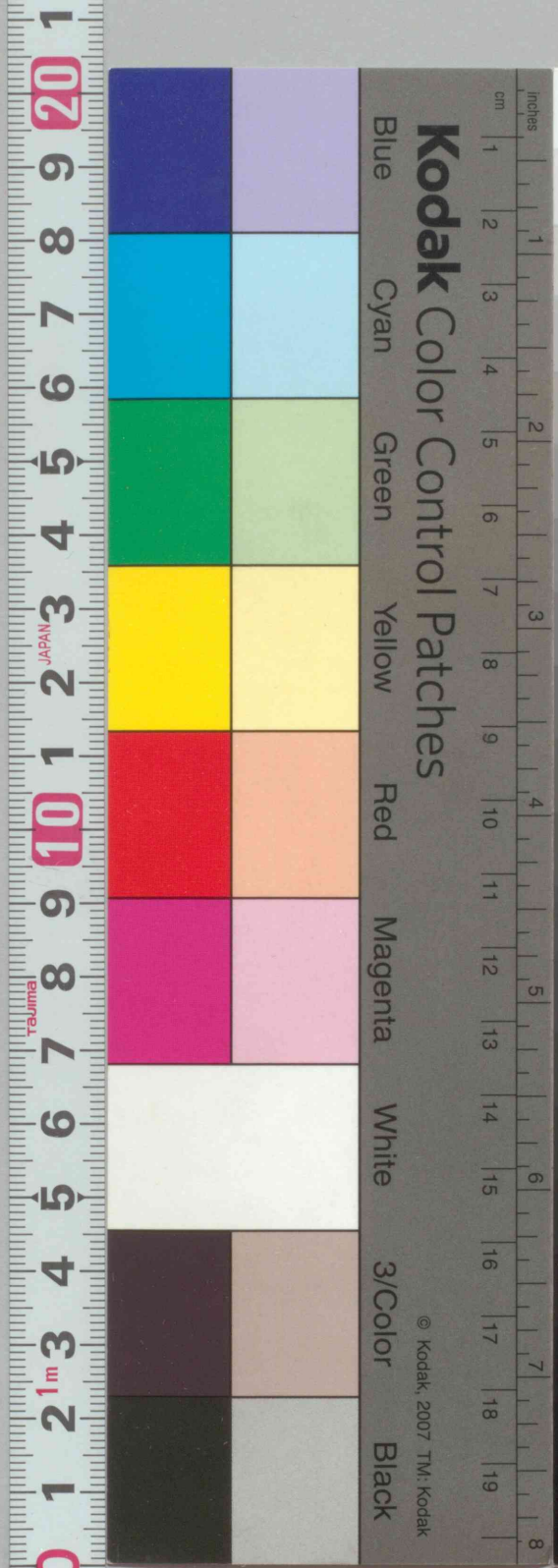


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



小学生の社会
十日町の
町長さん

3上

坂西志保編

日本書籍

贈
文部省検定済教科書
小社 303
日書

小KD
N87

贈 寄

中央図書館

小学生の社会 十日町の町長さん

昭和 年 月 日
文 部 省 検 定 済
小 学 校 社 会 科 用

教科書文庫
6
301
34-1950
0130449988

3上



広島大学図書
0130449988
[Barcode]

指導者のかたがたへ

『小学生の社会』三年上「十日町の町長さん」及び三年下「たから村の子どもたち」は、文部省の学習指導要領社会科編及び学習指導要領補説にもとづいて編さんしました。補説に示された学習内容とこの本の内容との関係は、下表の通りであります。

この本では、仮名の商業町「十日町」を中心とし、それと関連を持つ中都市「高野市」農村「たから村」、漁港「月のはま」などを地域社会とする生活について、ものがたりを構成しました。

自分の住む町や村の人々がどのように生活し、その生活がどのように成り立っているかということ、児童が喜びを以て理解するならば、児童は必ず自分もそのよき一員たらんことを望み、またそのために努力するであります。そしてそのために、この本が興味と感動とを以て読まれ、児童の学習意欲をそるるよう役だてていただけるならば、この上もないしあわせであります。

巻末の「しらべましよう」は、この本の内容をまとめると共に、学習作業への導きとなる、幾つかの問題をとりあげました。地域の実状に応じて、多くの問題の提起と、作業単元の構成とが期待されます。

郷土の交通と船着場	動植物と人間の生活	町の生活	いなかの生活	補説の学習内容
道路 汽車と電車	郷土の産業と動植物 衣食住と動植物 交通運輸と動物 生命資源の保護と動物 愛がん動物と鑑賞用植物 動植物の飼育栽培のくふう 大昔の人々の動植物の利用	自然的条件 区域と交通 町のくらし 公共施設その他 町の慰安娯楽 村と町の比較、両者の関係 その土地の起りと昔の生活	自然的条件 村落と交通 村のくらし 公共施設 村の慰安娯楽 昔の村と今の村	下巻 下巻 下巻 下巻 下巻 下巻
4	1	1	1	1
3	1	1	1	1
7	8	6	2	3
8	8	4	3	3
4	下巻	6	4	4
7	下巻	下巻	5	5
8	下巻	下巻	6	6
下巻	下巻	下巻	7	7
下巻	下巻	下巻	7	7

1 十日町

- 一 ぼたんの町……………4
- 二 くすりやさん……………7
- 三 古い町役場……………10
- 四 きよねんのもけい……………14

2 町のために

- 一 町長さんのカーブ……………17
- 二 としよかんの本……………21
- 三 この町のために……………24
- 四 林さん……………27

四月のはま……………65

五 夏がきたら……………68

5 町の水道

- 一 あそびばは、あと……………72
- 二 水道を引いてください……………75
- 三 みんなの川……………79
- 四 みんなのしあわせ……………82

6 青物いちば

- 一 青物いちば……………86
- 二 「あきら」号……………89
- 三 秋のおまつり……………92
- 四 たから村のさかい……………95

五 りっぱなしごと……………30

3 町のもけい

- 一 話しあい……………34
- 二 駅のきんじょ……………38
- 三 駅のやくめ……………42
- 四 製糸工場……………49

4 月のはま

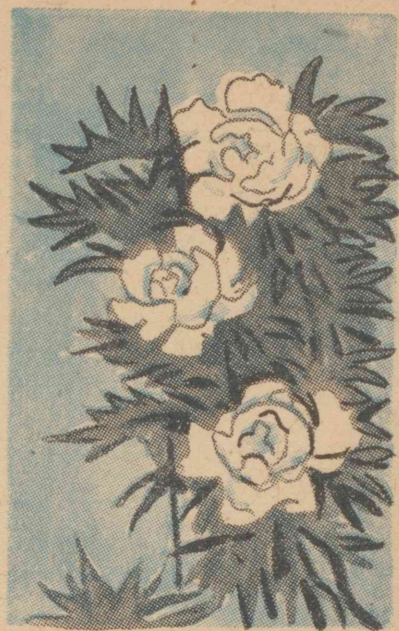
- 一 魚いちば……………54
- 二 トラックのうんてんしゅ……………57
- 三 どうげをこえて……………60

7 町の道

- 一 本町かど……………100
- 二 高野市……………103
- 三 こまつた道……………107
- 四 みんなで直す……………111
- 五 友だち……………113

8 三年生のお話

- 一 もけいができた……………117
- 二 小村学級の話……………120
- 三 野見学級の話……………123
- 四 杉山学級の話……………126
- しらべましょう……………129



1

十日町

一 ぼたんの町

十日町のことを、近くの人々は、ぼたんの町とよんでいます。それは、十日町に、名高いぼたん園が

あるからです。

ぼたんのさかりは、五月の中ごろから、おわりごろにかけてです。そのころになると、十日町は、ぼたん園へ出かける人々で、たいへんにぎやかになります。町の人たちや、近くの村の人たち、それによいぶん遠くから、わざわざ、このぼたん園のぼたんを、見に出か

けてくる人たちもあります。

遠くからくる人たちは、まず、十日町の北のはずれにある駅におりて、そこから、ぼたん園行きのバスにのります。このバスは、ふだんは、汽車がついたびに出るだけですが、ぼたんのさかりのころにはなん回も、ぼたん園との間を、いきかえりするのです。

バスは、ひろと広戸川にかかった、コンクリート作りの、十日橋をわたります。そこから一キロばかりの間が、十日町の本通りで、いちばんにぎやかな所です。この道は、こくどう国道で、そのまま、まっすぐ行くと、むかしの一里づかのある、まっなみ木の間を通って、たかのし高野市へ通じています。(36ページ、37ページさしえ)

ぼたん園へ行く道は、そのとちゅうで、東へまがるのです。これ

は、県道です。この道の両が
わは、すぐに田や畑になり、
二キロばかりで、ぼたん園の
入口が見えてきます。あなた
がたは、ぼたんを見たことが
ありますか。ぼたんは「百花
の王」といわれるくらいで、
ほんとうに、りっぱな花をさ
かせますよ。

さかりのころには、なん千
というぼたんの花が、このぼ

たん園にさくのです。

二くすりやさん

ぼたん園には、年とつたのも、わかいのも、あわせて千本近くの、
ぼたんの木があります。ぼたん園に、そんなにたくさんぼたんの
木があるのは、けっして、しぜんにそうだったのでありません。
長い間、町の人々が、たんせいしたからです。

いちばんはじめに、ぼたんの木をここにうえたのは、町の山本さ
んというくすりやさんでした。

山本さんは、ぼたんの根ねからくすりをとるために、苗木なぐさを遠くか
ら買ってきて、じぶんの畑にうえました。それは今から百八十年ば



かりむかしのことで、そのころのくすりは、たいてい、草や木を使
つて、作ったものだったのです。

山本さんの子も、まごも、くすりやをしながら、みんな、ねっし
んに、ぼたんのせわをしました。はじめは、たった十二種しふだった苗
が大きくなり、かぶわけされて、だんだんふえてきました。町の人
たちも、花を見てたのしむようになりました。今から五十年前には、
もう、ぼたん園のぼたんは、種類しゆるいが二百あまり、千かぶほどにもな
りました。

山本さんの家の人たちは、代々だいだい、ぼたんの花がすきでした。たん
せいをつくしたぼたんの一つ一つが、りっぱな花をさかせてくれる
のを見るのは、どんなにたのしいことでしょう。山本さんの家では、

きつと、ぼたんがさかりになると、家ちゅうをろって、にこにこし
ながら、ぼたんの花を見てあるいたにちがいありません。

けれども、山本さんの家の人たちは、じぶんたちだけで、たのし
もうとは、思いませんでした。町の人たちをよんで、ぼたんを見て
もらいました。話をきいてやってきた人には、だれにでも、よろこ
んで見せてあげました。

町の人も、村の人も、ぼたん園へくるのが、年に一どの、たのし
みでした。

「ここへくると、ほんとうに、長生きができるような、気もちにな
ります。」

と、ある人はいいました。

ここにいれば、だれだって、わるいことは、なんにも考えられなくなるでしょう。」

と、ある人はいいました。

山本さんの家は、今でもくすりやさんです。国道から県道へまがる、まがりかどにある、大きなくすりやさんがそれです。

三 古い町役場

十日町へ遠くからやってくる人たちの、びっくりすることがあります。それは、りっぱなたてもものが多いことです。けいさつしよ、しよぼうしよ、ほけん所、ほいく所など、みんなあたらしくて、りっぱなのです。

十日町へ、時々やってくる人たちは、そのたびに、あたらしいたてものができているのに、おどろきました。

けれども、ほんとうは、もう一つ、おどろくことがあるのです。

それは、町役場です。町役場は、小学校のうらがわにあります。

東京からぼたん園のことをしらべにきた、あるぎっしの記者が、町長さんにあいにきました。記者は、役場が、古くて、小さいのにびっくりしてしまいました。

話のあとで、記者は、

「どうして、ほかのたてもものは、りっぱなのに、役場だけは、こんなに古いのですか。これでは、しごとをなさるのに、みなさんがふじゆうではありませんか。」

と、たずねました。

「いいえ、そんなことはありません。」

と、町長さんはこたえました。

「みんなも、わたくしも、すこしも、ふじゆうではありません。ごらんください。みんな、気もちよく、しごとをしているでしょう。それに、町では、まだまだ、たくさんのお金をかかります。ここでしごとをしないでいる人たちは、みんな、こんないいところはないと、いつているのです。」

「なるほど。」

と、記者はいいました。

「そうおっしゃれば、みなさん、ほんとうに、いきいきと、はたらいていらっしやいますね。」

「それに町の人たちは、みんな、わたくしたちのしごとを、心からよろこんでくれています。」

と、町長さんはいいました。

「どのつくえの上にも花がかがざってありますが、あれは、



学校の子どもたちが、まい朝きて、かぎってくれているのです。」

四 きよねんのもけい

町長さんの話のように、つくえの上には、どこにも花がかぎってありました。それは、学校の子どもたちが、役場の人たちの心を、たのしませてあげようと話しあって、していることでした。家で作っている草花もあり、野原や、道ばたの花もありました。

もう一つ、記者の目をひいたものがありました。それは、うけつけ受附のすぐ前にある、紙かみで作った、町のもけいでした。

「これは、学校の子どもたちが、作ったものです。」
と、町長さんはいいました。

「ほんとうに、よくできていますでしょう。」

「なるほど、これはりっぱだ。」

と、記者は、もけいを、上からのぞきながらいいました。

「おや、これは、けいさつしよでしょう。すこし、ちがっているようですね。」

「そうです。これは、きよねんのもけいですから。きよねんの三年生が作ってくれたのです。」

「三年生というと、」

と、記者はいいました。

「小学校の三年生ですか。」

「そうですとも。きよねんの三年生も、おととしの三年生も、作り

ました。ここへきた人たちは、このもけいを見て、みんな、よろこんでくれます。それに、わたくしも、まい年、あたりしくなつていく町のすがたを見ると、ほんとうにうれしいのです。

と、町長さんはいいました。

一 町長さんのカーブ

ひる休みに、はじめさんと、つとむさんと、まことさんは、うんどうばで、キャッチボールをしました。はじめさんのなげたまがひくすぎて、つとむさんのグローブの下をくぐり、むこうへころがつていきました。ちょうど、そこをあるいてくる人が、うまく、たまをとめてくれました。つとむさんは手をあげて、

「おねがいします。」

と、その人にむかってさげびました。その人は、たまを手にもったまま、つとむさんのところへ、やってきました。

「あっ、町長さんだ。」

と、はじめさんがいきました。それは、ほんとうに、町長さんでした。がっしりとかたのはった、からだの大きな町長さんは、つとむさんとならぶと、お話の中に出てくる、大男のように見えました。

「あんなに、ひくいたまをなげるようでは、だめだね。」

と、町長さんは、日にやけた顔を、にこにこさせながら、いいました。

「わたしが、てほんを見せてあげよう。」

町長さんがなげるとき、しらがが、きらきらと光りました。たまは、スポンど、はじめさんのグローブにはいりました。はじめさんは、びっくりしてしまいました。そうつとなげたように見えたのに



たまがグローブにはいったとき、
てのひらがしびれるほどだったか
らです。そのたまは、近くへくる
と、ヒューツとうなりをたてて、
こわいようでした。

三人は、かわるがわる、町長さ

んのたまをうけとりました。

「町長さん、カーブをなげてください。」

六年生の竹中さんが、そばへきていきました。いつのまにか、子どもたちは、まわりに集まってきていました。

「よろしい。こんどは、大きい人がうけとつてくれたまえ。」

町長さんは、こんどは、六年生をあいてにして、カーブをなげました。ものすごく、大きくまがるカーブです。なんべんなげても、同じところへまがるカーブです。

「こんどは、ドロップをなげてください。」

と、竹中さんがいいました。そのとき、町長さんはきゅうに手をやめて、

「やあ、校長先生。」

と、いいました。

「子どもたちに、あそんでもらっておりますよ。」

「みごとなカーブをおなげになりますな。」

校長先生は、子どもたちの前へ出てきて、そういいました。

「さきほどから、はいけんしていました。」

「いやいや、もう、なん年も、たまをもちませんので。じつは、き

ょうは、ごそうだんがあつて、うかがいました。」

町長さんは、校長先生とやらんで、あるきだしました。

二 としよかんの本

校長さんの話というのは、としよかんの本のことでした。すこし前に、学校としよかんができましたが、本は、なかなか買えません。子どもたちは、ひとりでべんきょうするのには、たいへんこまっています。

「そういう子どもたちのために、使ってもらいたいというので、わ

たくしがたのまれたお金なのです。」

と、町長さんはいいました。

「その人は、まだわかい学者がくしゃでした。死んだときにある会社かいしゃから、お礼のお金がとどけられました。その人のけんきゅうが、会社のために、たいへん役にたったからです。その人は、ふだん、口ぐせのように、日本の子どもたちが、りっぱな人になってくれるようにと、いっていました。それで、家の人たちは、そのお金を、子どもたちのために、使っていたきたいと、思ったのです。」

「それは、ほんとうにありがたいことです。」

と、校長先生はいいました。

「それは、」

と、町長さんはいいました。

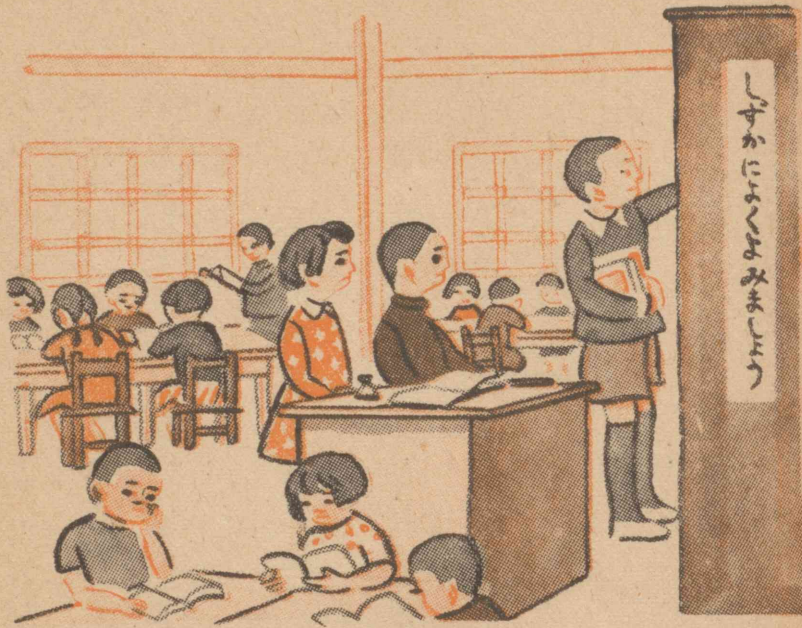
「家の人たちが、いわないでいてくれということなので、申しあげないことにいたしましょう。」

「それでは、」

と、校長先生は、「こまります。」

と、いいかけて、あのことばをだしませんでした。

町長さんの目は、うるんでいました。それを見て、



「ああ、町長さんも、わかひむすこさんをなくされたのだった。町長さんは、きっとそのことを考えて、いられるのだらう。」
校長先生は、そう思ったからでした。

三 この町のために

子どもたちは、だれでも、町長さんを知っていました。町の人で町長さん知らないものは、ひとりもありませんでした。ただ知っているというだけでなく、みんな、じぶんの友だちだと思っていました。

町長さんの名前は、高山清春きよはるといます。

町長さんのせんきよせんきよがあつたとき、町の人たちの半分以上は、そ

れまで、町会議長まちぎをやっていた、林さんという人がなるだらうと、思っていました。ところが、林さんは、こうほしこうほしになることを、すすめにきた人たちにむかつて、いいました。

「高山さんがいい。高山さんに、ぜひ、おねがいすることだ。」

高山さんは、なかなか、しやうちしませんでした。高山さんは、長い間、東京の、ある会社につとめていました。つごうがあつて、会社をやめてから、この十日町へかえつてきました。生まれこきよこきようの、十日町にすむようになったのは、高山さんにとっては、ずいぶん、ひさしぶりのことでした。

「それは、とんでもないことです。」

と、高山さんはいいました。

「わたくしは、長い間会社のしごとをしていたので、町のしごとには、ふむきな人間ひとです。それに、ここへきてから、まだ二年ぐらいにしかなりません。町のことは、よくわかっていないのです。けれども、林さんたちは、なかなか、ひきさがりませんでした。林さんは、十日町にずっとすんでいますし、町のしごとにもよく知っていました。林さんなら、町長のしごとも、きつと、りっぱにやることができたでしょう。けれども林さんは、じぶんより、高山さんの方が、もっとりっぱなしごとができる、思ったのです。

なんべんも、なんべんも、林さんたちがたのんだので、とうとう、高山さんは、町長のこうほしやになることをしようちしました。

「わたくしは、みなさんが考えてくださっているような、りっぱな人間ではありません。けれども、町のかたがたが、みんな、わたくしに町長のしごとをせよというのなら、わたくしは、この町のためだけにできるだけのことをいたしましょう。」

高山さんは、そういいました。

四 林さん

じっさい、町のしごとはたいへんでした。

町役場の人たちは、かすがへっているのに、しごとはふえているのでした。町の人たちのかずも、ずいぶんふえましたし、それに長い間、手いれのできなかったこともあり、あたらしく、たてものをたてることもあります。道を直すしごとも、あります。水道のしご

と、でんきのしごともあります。はいきゅうのしごと、えいせいのしごと、それに、ぜい金のしごともあります。

町役場のしごとが、はかどらなければ、こうしたしごとは、みんな、はかどらなくなります。たてものが、なかなか、たたなければ、そこでしごとをする人々がこまります。道を直すのがおくれれば、通る人がこまります。水道、でんき、はいきゅう、えいせい、ぜい金、みんな、うまくいかなければこまることばかりです。

町の人々がどんなにはたらいても、役場のしごとがうまくはこんでいなければ、町はよくならないのです。

町役場の人たちは、あたらしい町長さんをむかえると、まもなく、見ちがえるように、いきいきとしてきました。何よりも、それに役



だったのは、町会議長の林さんが、町長さんのしごとをたすけるために、助役じやくになったことでした。

林さんは、高山さんが、町長にえらばれたときから、助役になることを、心にきめていたのでした。

もと、長い間、町役場のしごとをやってきた林さんが、町会議長をやめて、助役をつとめることになったのです。役場の人たちは、みんなよろこびました。

五　りっぱなしごと

あたらしい町長さんの顔は、まもなく、町のどこでも見られるようになりました。学校、ゆうびんきょく、しょうぼうしょ、けいさ

つしよ、びょういん、魚いちば、えいがかん、子どものあるびば、どこへでも、町長さんは出かけていきました。町長さんと話しているとき、どんな人でも、いきいきしてきました。じぶんが、世のなかのために、りっぱなしごとをしているのだ、という気もちがげんきにわいてきました。

子どもたちは、学校で、時々、町長さんの話をききました。



これまで、子どもたちは、町長さんというのは、いそがしい人なので、そんなに、町の人たちとなかよしになる時間などはないのだと思っていました。これまでの町長さんのときは、子どもたちの中には、顔を知らないものも、名前を知らないものも、たくさんいました。

あたらしい、町長さんの話を聞くようになってから、子どもたちは、町のことだんだんわかってきました。

はじめのうちは、町長さんのやりかたが、気に入らない人たちもいました。

「あんなやりかたでは、だいなことがおろそかになる。町長には、もっただいなしごとがあるはずだ。」

と、ある人はいいました。

けれども、そういう人たちも、だんだん、わる口をいわないようになり、しまいには、町長さんと、なかよしになりました。なぜなら、だいなしごとは、何一つとしておろそかにされず、町は、だんだんりっぱになっていきましたから。町長さんは、いつ、どこであつても、いちばんいいそうだんあいてで、いちばんげんきな友だちでしたから。

一 話しあい

三年のはじめさんたちの組では、すこし前から、町のもけいを作るしごとを、みんなで、はじめていました。

前の三年生が作った町のもけいは、三つありました。それは、役場と、学校と、としよかんとにありました。はじめさんたちは、いちばんはじめに、そのもけいと、町の地ずをくらべて、よくしらべました。それから、町を五つにわけて、五つのグループが、それぞれ、つぎのように、受けもつことにしました。

一のグループ 広戸川の北がわ

二のグループ 国道の西がわの北半分

三のグループ 国道の西がわの南半分

四のグループ 国道の東がわの北半分

五のグループ 国道の東がわの南半分

そのつぎに、もけいの大きさをきめました。全体の大きさがきま
ってから、道とか、川とか、橋とか、たてものや、木などの、大体
の大きさをきめました。それから、どんな紙を使うかということや、
どんな色を使うかということなども、話しあいました。

こうして、全体のことがきまってから、こんどは、グループごと
にわかれて、じぶんたちのやりかたを、話しあいました。

「それでは、」

1 2 3
 駅 製 十
 糸 日
 工 場
 橋

4 5 6
 町 地 方
 の け い さ つ し ょ
 び ょ う い ん しょうあんていしよ

7 8 9
 ゆ う び ん き ゃ く
 魚 市 場
 国 家 け い さ つ し ょ



10 と し ょ か ん
 11 学 校
 12 役 場

13 青 物 市 場
 14 し ょ う ぼ う し ょ
 15 農 業 学 校

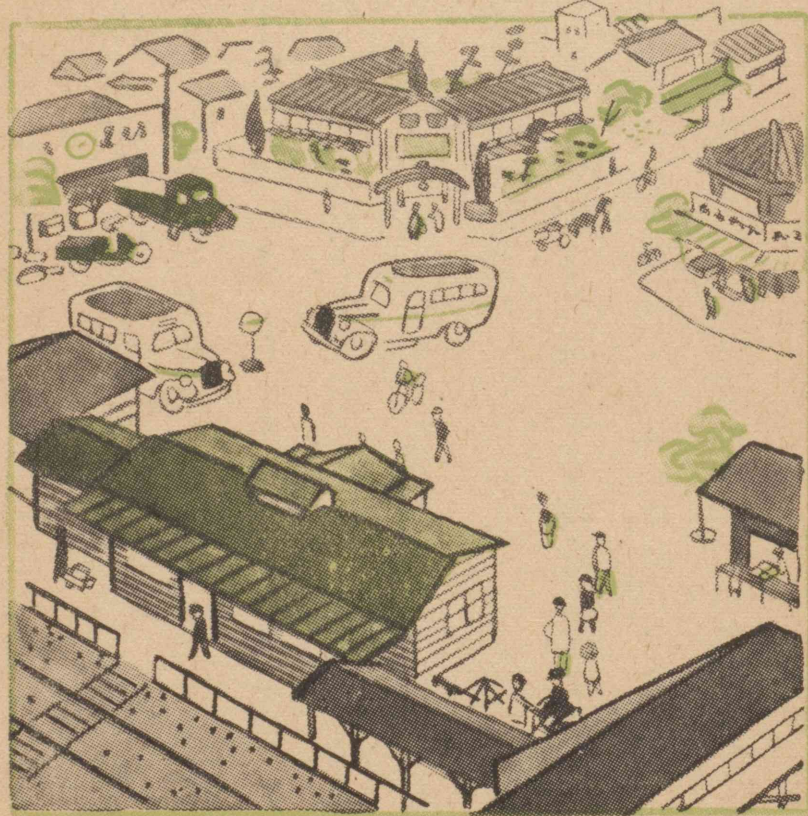
16 一 り づ か
 17 水 道 の タ ン ク
 18 グ ラ ウ ン ド

19 桜 公 園
 20 子 ど も の あ そ び ば
 21 石 切 場

22 23 24
 中 り 鉄
 学 校
 橋 橋 橋

25 26 27
 し 松 り
 ょ う ぼ う し ょ う ぼ う し ょ
 の 池 山

28 29 30
 ふ 高 ば
 た 等 た
 つ 学 ん
 池 校 園



紙工場しこうじょうです。

一のグループの受けもち場所にある、大きなたてものは、駅と製

と、そのあとで、小村先生がいきました。
「よてい通りに、できあがるように、みんな、いっしょうけんめいにやりましょうね。どんないいもけいができるか、先生は、ほんとうにたのしみですよ。それから、これは、先生が考えついたことですが、みんな、じぶんのやったこと、気のついたこと、おもしろかったこと、こまったこと、なんでもいいから考えついたことは、ノートにかいておいたら、どうでしょう。」

二 駅のきんじよ

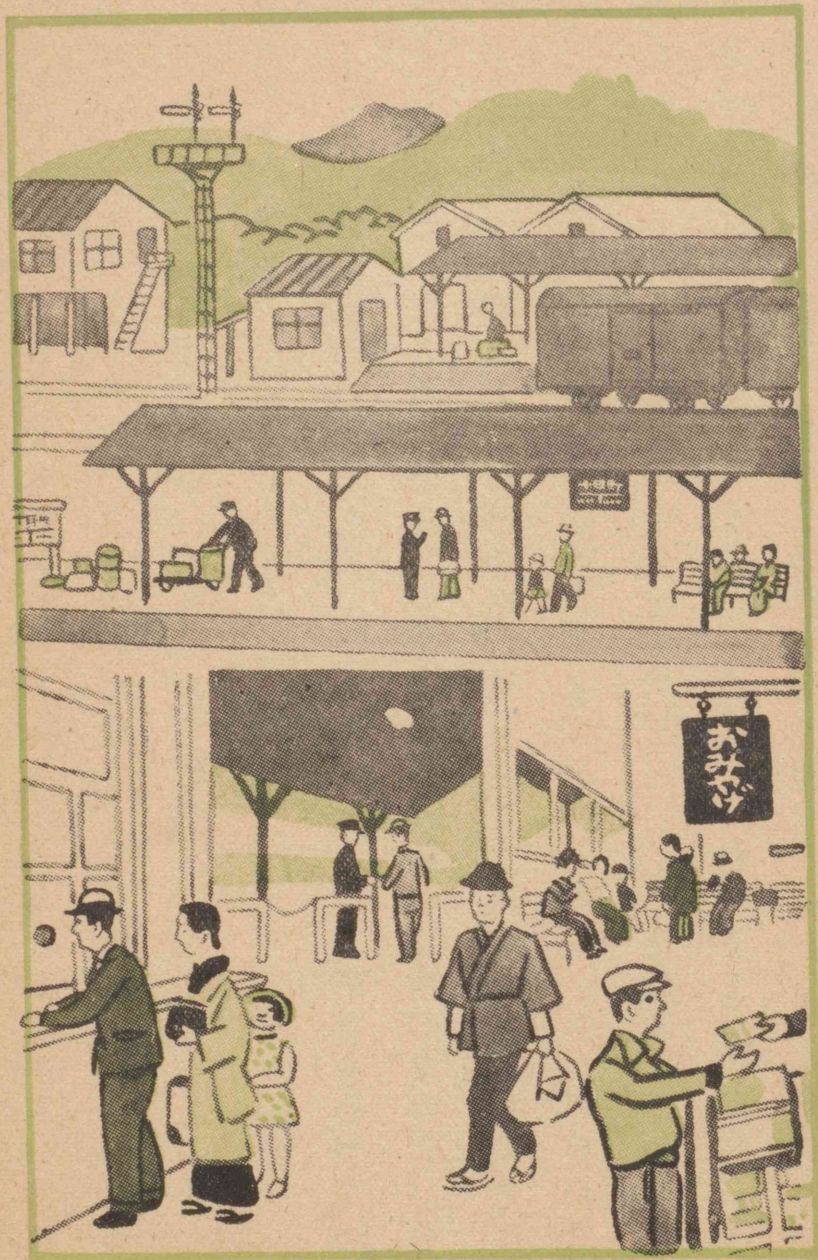
江戸川にかかった十日橋の上に立って、北の方を見ると、まっすぐな道のむこうに、駅が見えます。十年ぐらい前までは、十日橋のたもとの、下のところには、大きな水車小屋がありました。そこでは、一日ぢゅう、水車がまわっていました。その前のところで、川には、せきが作られていました。せきの下のところは、あさくなっているの、小さな子どもでも、魚をすくったり、バチャバチャおよいだりすることが、できるのでした。

水車は、米やむぎをつくの、かなりだいじな役をつとめてきました。けれども、町にでんき部ができてからは、そういうことにも、でんきが使われるようになりました。大きな白かべの水車小屋があるために、十日橋のあたりは、今でも、なかなかいいけしきです。

駅までの道の両がわには、うんそう屋や、たべものを売ったり、店でたべさせたりする店、それから、やど屋、おみやげ店などが、たくさんならんでいます。

駅の前からは、四つの方面へ行くバスが出ます。国道をまっすぐに行くのが、農学校の前を通り、一里づかのあるまつなみ木の間を通って、高野市へ行くバスです。高野市へは、汽車にのつても、すぐ行けます。けれども汽車の出る間の時間が長いので、その間に、バスが出るのです。ほかの三つの方面へ行くバスは、それぞれ、鉄道から遠い地方の、中心にある町へ行くのです。

こういう町々へ行くのに、バスがなかった時代は、どんなにふべんだったでしょう。今でも、バスの通る道は、田や、畑の間を通っ



ていく所が多いので、なかなか楽ではありません。からだもつかれますし、それに、バスもいたみやすいのです。バスが楽に通れるようになったら、どんなにいいことでしょう。

三 駅のやくめ

鉄道が、十日町を通るようになってから、十日町の人々は、どんなにべんりになったか知れません。それまでは、遠い所へ行くのは、ずいぶん、時間がかかりました。時間がかかるばかりでなく、からだのわるい人には、長い旅はできませんし、その間には、いろいろ、さいなんにあうこともありました。

べんりになったのは、十日町の人々ばかりではありません。かな

りふべんなどころの人々も、十日町へ出てくれば、ここから汽車にのって、遠くへ行くことができるとです。

こうして、人のゆききがべんりになると同じように、いろいろな品ものも、送るのがべんりになりました。

十日町の東にあるたから村は、むかしから、米と野菜を作っていました。鉄道ができるまでは、たから村の野菜は、村の人たちが、じぶんたちでたべるもののほかは、ほとんど、十日町に送られました。そのころは、十日町の人のかずも少かったので、たから村の野菜は、たくさんは、いりませんでした。ところが、鉄道が、十日町を通るようになると、すっかり、ようすがかわりました。

たから村の白菜は、十日町の駅から、南の、遠くむこうにある、大きな町に送りだされるようになりました。たから村の白菜は、もどから、あじのいいのがじまんでした。そして、大きな町では、あじのいいということも、だいじなことになっていましたので、たから村の白菜は、たくさん、売れるのでした。

また、たから村のにんじんや、ごぼうや、ねぎなどは、北の方の町へ、たくさん送られるようになりました。雪の深い、北の方の町では、冬が長いので、こういう、しまっておくことのできる野菜が、ほしいのでした。

たから村は、このように、鉄道が十日町を通るようになったおかげで、今まで、考えることもなかったような、たくさん、いい野菜を作るようになったのです。たから村が、むかしにくらべてみる

と、たいへんゆたかになったのは、鉄道のおかげでした。

それでは、十日町はどうでしょうか。

十日町から、作って送りだすものは、たくさんはありません。十日町は、もともと、近くの村々へ、いりような品ものをあきないする人々で、できている町でした。近くの村の人々は、きものや、たべものや、そのほかの日用品を、十日町へ買いにきました。十日町では、そういう品ものを、たくさん買って置いて、村の人々に売りました。鉄道が通るようになってから、十日町では、時間も少く、安いうちんで、品ものがたくさん買えるようになりました。そして、たから村と同じように、近くの村々も、前よりゆたかになりました。そのおかげで、十日町のあきないも、はんじょうするようになりました。



駅へくるもの

駅からだすもの

なりました。

もう一つ、十日町が、鉄道のおかげをこうむっている、だいたいな
ことがあります。それはなんてしよう。

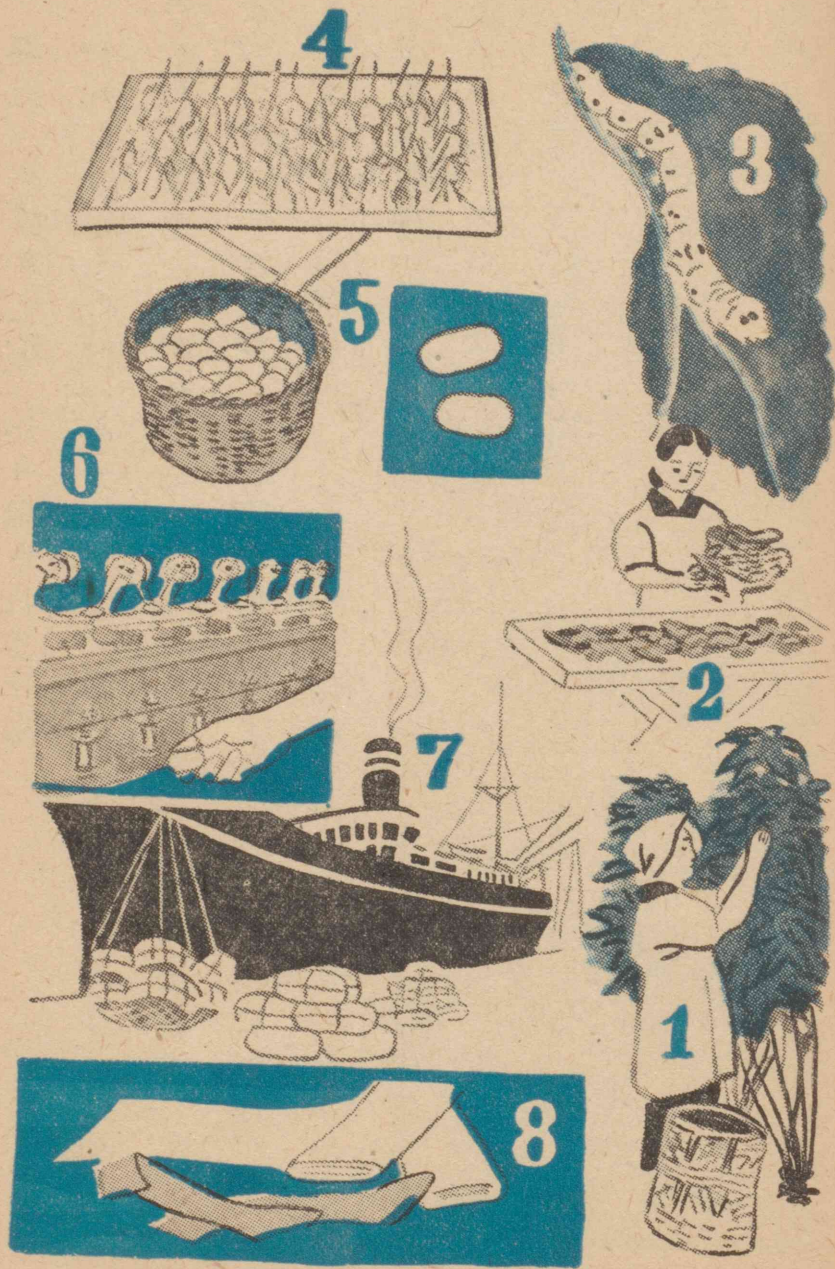
ぼたん園が、そうです。一年に二十日間あまりの間ですが、それ
でも、なん万という人々が、汽車にのって、十日町へやってきます。
十日町では、まず、バスがはんじょうします。おみやげ店が、は
んじょうします。たべもの店、やど屋がはんじょうします。もし鉄
道が通じなかったら、こんなにたくさんの人が、十日町へやってき
て、お金を使うという事は、なかったはずです。十日町は、こん
などころでも、鉄道のおかげをこうむっているといえるでしょう。

もう一つ、わすれてならないことがあります。それは、十日町は、
いろいろな品ものをしいれて、近くの村々へ売りますが、そういう
品ものは、たいてい、十日町の人々も、まい日、使わなければなら
ない品ものだということですよ。

よく考えてみると、十日町の人々が使っているものは、ずいぶん
たくさん、ほかから送られてきているのです。そして、そのうち、
ずいぶん、たくさんのもものが、遠くから送られてきているのです。
そうしてみると、十日町にとって、駅は、まい日、だいたいな役をつ
とめているわけです。

四 製糸工場

国道は、駅の前で右へまがっています。その道をすこし行くと、



上原会社の製糸工場があります。
十日町の近くの村々では、かなり古くから、かいこをかっていま
した。上原会社の製糸工場は、それらの村々のまゆをあつめて、糸
を作るのです。十日町から、ほかのところへ送りだすもののうちで、
生糸は、いちばんお金になるものといふことができます。
そのほかには、げたの材ざいがあります。石いしがあります。かわらがあ
ります。
げたの材は、一時は、かなりたくさん作つて、遠くへ送りだされ
ましたが、このごろは、少くなりました。げたにかわつて、くつが、
だんだんに、はかれるようになったからでしょう。

石は、わずかしが、切り出されません。

かわらは、土のいい山が、近くにあるために、かなり古くから、やかれていました。そのために、かわらをやくやりかたも、なかなかすすんでいました。十日町のかわらといえは、いいかわらだというので、近くの町や村には、よく知られているのです。そういえば、上原製糸工場のやねも、あずき色のかわらですし、十日橋のむこうに見える、町のびょういんのやねも、あずき色のかわらです。

汽車にのって、十日町の近くへくると、だんだんに、この、あずき色のかわらが、目につくようになります。この地方の人々は、それを見ると、ああ、じぶんの家が近くなったなど、ほっとした気もちになるのです。



上原製糸工場のすこし先に、火の見やぐらが立っています。このあたりは十日町といっても、たいていは農家です。

火の見やぐらのもけいは、きつと、さゆりさんがうまく作るでしょう。一のグループでは、さゆりさんが、工作が、すばらしくじょうずですから。

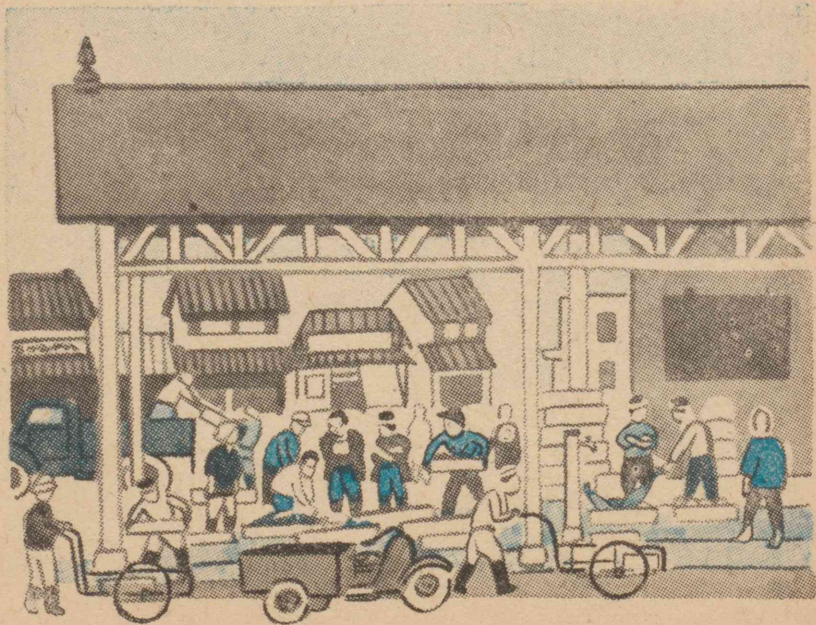
一 魚いちば

二のグループの受けもち場所には、町のびょういん、地方けいさつしょ、ゆうびんきょく、ほいく所、魚いちばなど、たくさんのたてものがあります。

国道にむいたところは、たいてい、店やです。県道に近いところに、魚いちばがあります。十日町の魚いちばは、ここが一つで、ここへは、町ぢゅうのさかな屋さんが、まい朝、集まります。トラックからおろされた魚は、はこや、たるにいったまま、ねだんをつけられます。さかな屋さんたちは、魚をかこんで、買おうと思う魚が出ると、

めいめい、ねだんをつけます。いちばん高いねだんをつけたさかな屋さんが、買うことになるのです。さかな屋さんたちがねだんをつけるときは、なん百円、なん十円と、いわずに、さかな屋さんだけにわかる、いいかたでいいです。大きなこえで、みじかくいうので、そばできいてみると、まるで、けんかをしているようです。

十日町へくる魚は、たいてい、



トラックで、月のはまから、はこばれてくるのです。月のはままでは、かなり遠いのだ、とちゅうで山をこえなければならぬので、たいへん、時間がかかります。それで、トラックは、夜のあけないうちに十日町を出て、おそくとも、夜のあけるころには、月のはまに、ついていなければなりません。

トラックが使われないころは、魚は、月のはまから、汽車で、送られてきました。汽車で送るときには、いったん高野市に出て、それから、十日町へくるのです。それだと、時間がよけいにかかるので、このごろでは、ほとんど、汽車は使われないようになりました。それでも、汽車で送るようになってから、十日町の人々は、なまの魚が、たべられるようになったのです。それまでは、魚といえば、

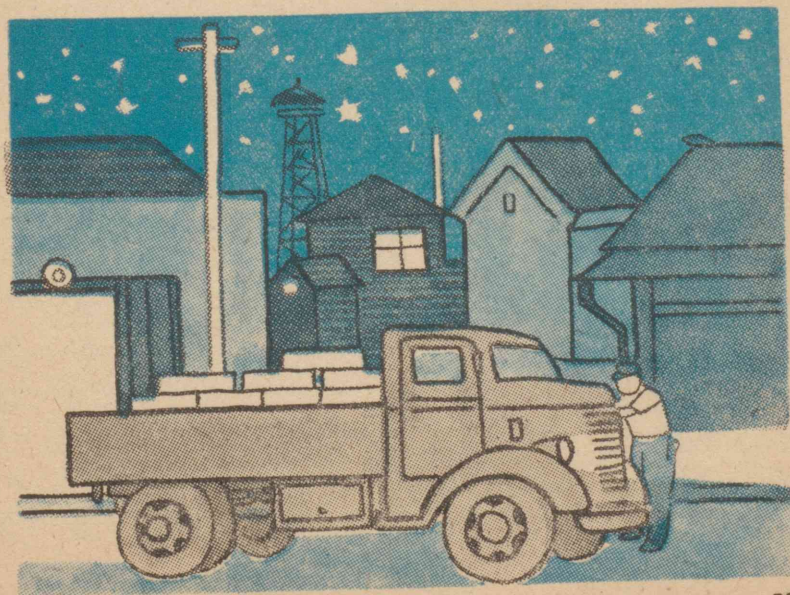
塩^{しほ}ざけか、ほした魚ぐらいがせいぜいでした。それで、今でも、年とつた人たちは、なまの魚といえば、たいへんありがたいもののように、考えているのでした。

二 トラックのうんてんしゅ

二のグループの中では、さとしさんだけが、月のはまのことを知っています。さとしさんのおとうさんは、トラックのうんてんしゅです。おとうさんは、ずいぶん早おきです。さとしさんが、朝、おとうさんの顔を見ることは、一年のうちで、いくらもありません。おとうさんは、月のはまから、トラックで魚をはこぶようになって、たときから、すぐ、そのうんてんをはじめました。こととして、五年

目になります。が、まだ、一ども、休んだことがあります。

「町の人たちのためだと思えば、どうしても休むわけにはいかない。わたしは、じぶんのためだけになく、町の人たちのために、からだに気をつけなければならぬ。」
と、おとうさんは、よく、いいます。まい朝早くおきて、一日四時間以上も、トラックでゆられるのですから、なかなか、からだにはこたえるので



す。楽をしてはたらこうとか、じぶんのお金もうけのためにはたらこうとか、そういう考えだけの人だったら、きっと、一日でいやになっってしまうことでしょう。

おかあさんは、朝の三時におきて、おとうさんがおきるまでに、すっかり、したくをしておきます。月のはまについてからたべる、朝のおべんとうをもって、おとうさんは出かけるのです。

大下さんという、いちばの人も、おとうさんといっしょにのっていきます。大下さんは、月のはまでもいそがしいし、かえってきてからも、いちばのあきないがすむまでは、いそがしいのです。けれども、わかくて、げんきな大下さんは、今、うんてんしゆのめんじょうをとるために、じどう車のうんてんを、べんきょうしているの

です。

大下さんはいいいます。

「多田さんも、ひとりじゃたいへんですよ。早く、たすけてあげられるようになりたいな。」

大下さんは、きかいのことはくわしいので、きつと、すぐに、めんじょうをもらうことでしよう。

三 どうげをこえて

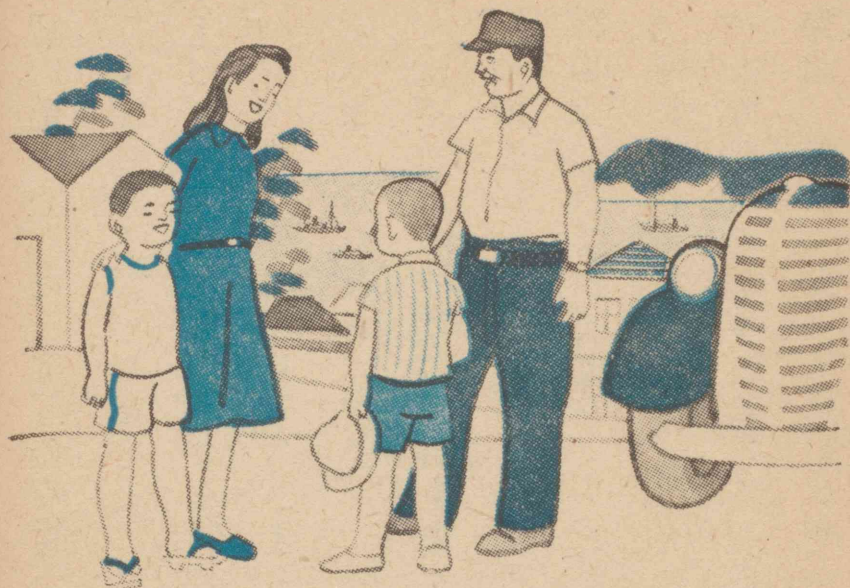
さとしさんは、きよねんの夏、おとうさんのトラックにのって、月のはまへ行きました。ヘッドライトにてらされたところだけが、はつきり見えて、だれも通らない、くらい道を、トラックは、どん

どん走りしました。はじめの間、大下さんと話していたさとしさんは、しばらくすると、大下さんによりかかって、うとうととしてきました。

「さとし君、夜あけたよ。」

大下さんのこえに、目をあくと、いつのまにか、トラックは、どうげの上に来ていました。ずっとむこうに海が見えて、ちやうど、まっかな日があがるところでした。海は、赤と、金いろにかがやいて





いました。

どうげですこし休んでから、トラックは、どンドン、下りはじめました。海は、右に見えたり、左に見えたりして、だんだん、明るくなっていきました。

月のはまの町にはいると、まもなく、きゆうに、トラックがどまりました。

「さあ、さとしは、ここでおりるんだよ。」

と、おとうさんがいいました。コンクリートの道の上に、さとしさんぐらいの男の子と、そのねえさんらしい人が、ここにこして、立っていました。それは、さとしさんをよんでくれた、川上さんの、子どものひろしさんと、ねえさんでした。

川上さんのうちは、道から西へあがった、おかの上にありました。ひろしさんも、ねえさんも、おとうさんも、おかあさんも、みんな、さとしさんのきたことを、よろこんでくれました。

「ここにいてる間は、君もこの子どもになって、げんきよくあそんでくれたまえ。」

と、朝ごはんをたべながら、川上さんはいいました。川上さんは、前に、十日町にいたことがありました。そのときから、さとしさん

のおとうさんは、川上さんの知りあいでした。川上さんは、今は、
この水産しけん場の場長をしているのです。

「ひろしは、あばれんぼうですからね。さとしさん、気をつけてく
ださい。」

と、ねえさんがわらいながら、いいました。

「さとしさんを、なかまにするつもりでいるんですよ。」

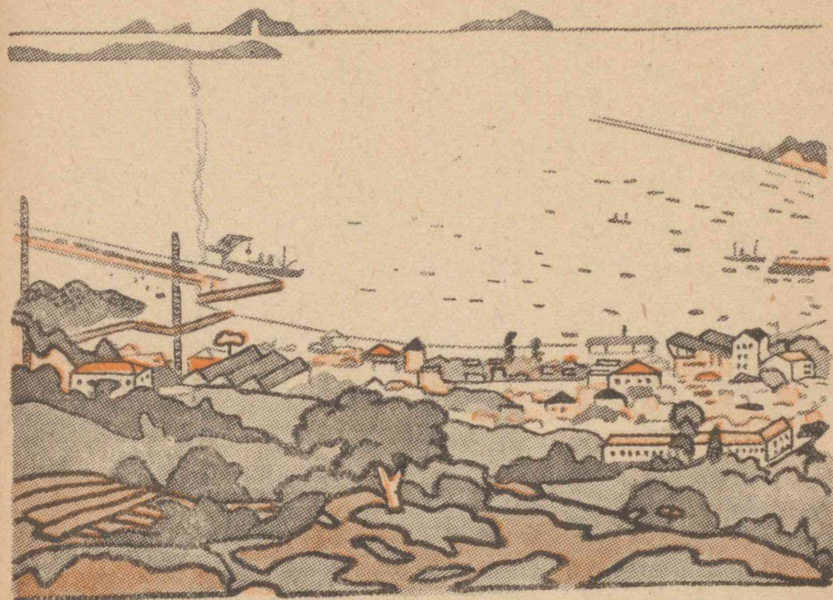
「ぼくがあばれんぼうだなんて。さとし君、ぼくは、ねえさんより
おとなしいよ。」

ひろしさんは、まじめになって、そういいました。

四月のはま

川上さんが出かけてから、さとしさんは、ひろしさんといっしょ
に、庭の、かきねのところへ行きました。そこからは、町も、海も
ひと目に見わたされます。

右の方に、アンテナの立っているのが水産しけん場です。天気のも
もよう、しおの流れ、魚のあつまっている場所や、その動きかたな
どを知らせるのも、しけん場のだいじなやくめです。そのそばの学
校は、水産高等学校です。水産会社のたても、製氷会社のたても
の、漁業組合、そのほかいろいろなくらが、海岸には、たくさんな
らんでいます。



とくに、さとしさんの目についたのは、石炭の山と、それを貨車から船へ、つみおろしするクレーンでした。この月のはまの町は、魚がとれるというだけでなく、近くにある炭山の石炭を、船でつみだす、港にもなっているのです。

空は、すっかりはれて、海はこい青色です。その青色の中へ白い防波堤が、くつきりと、つきでています。左の方に、うすむらさき

にかすんで見えるみさきには、白いとうだいがあります。港へはいつてくる大がたの漁船からは、はつとうきの音が、ポンポンと、ここまできこえてきます。もう魚をあげてしまった船、今、魚をあげている船、大きい、小さい、いろいろな漁船が、おもちゃのように見えます。

「いいけしきだねえ、ひろし君。」

と、思わず、さとしさんは、そういいました。

「うん。すばらしいだろう。」

「ぼくは、海を見るのははじめてだけれど、今まで、こんなにすばらしいとは、思っていなかったよ。」

さとしさんが、すばらしいと思ったのは、けしきだけではありま

せん。月のはまの町が、こんなにいきいきと、きれいで、うつくしいところだとは、ゆめにも考えていなかったのです。

五 夏がきたら

まつ黒くろになって、十日町へかえってきたさとしさんから、子どもたちは、月のはまの話をききました。船にのせてもらったこと、つりに行ったこと、さとしさんが、三十メートルぐらいも泳げるようになったこと、魚のこと、貝のこと、海草のことなど、さとしさんの話は、みんなには、めずらしくて、おもしろい話ばかりでした。特に、ひろしさんのことを話すときは、さとしさんは、力がはいりました。

「こんどの夏には、ぼくのうちへ、川上君をよぶんだよ。」
と、さとしさんはいいました。

「ぼく、やくそくをしたんだ。」

「いいな。そうしたら、川で泳ごうね。川上君は、うんどうまいんだらうなあ。」

と、山口君がいいました。

「うまいとも。クロールだってできるんだから。」

と、さとしさんはいいました。

——二のグループの人たちと、鉄道の上の橋から、白い雲を見ているうちに、さとしさんは、きよねんのことを思い出していました。もう、じき、夏がきます。ひろしさんがくるのです。

ひろしさんがきたら、いっし
よにあそんだり、見せてやりた
いことがいっぱいです。けれど
も、もし、ひろしさんだけでな
く、いっしょにあそんだ、ひろ
しさんの友だちも、みんな、い
っしょにきてくれたら、どんな
にゆかいでしょう。

もし、十日町と、月のはまと
の間が、わけなく行ったりきた
りすることができるようになっ



たら、きっと、ひろしさんは、友だちをひきつれて、やってくるに
ちがいありません。いや、もし、そうなれば、十日町の子どもたち
だって、みんな月のはまへ、おしかけていくことでしょう。そして、
今まで、顔も知らなかった人たちが、なかよしになれたら、どんな
にたのしいことでしょう。

二のグループの子どもたちは、いつのまにか、橋の上にかたまっ
て、こんなことを、話しあっていました。

一 あそびばは、あと

三のグループの受けもち場所には、国家けいさつしよ、小学校、中学校、町役場、桜公園、第一グラウンド、第二グラウンド、水道の浄水場などがあります。

「三のグループの人たちは、あまり、時間をとらないようにしまし
ようね。」

と、先生がいったのは、ここに、公園や、グラウンドがあるからです。そして、第二グラウンドというのは、子どものあそびばだからです。

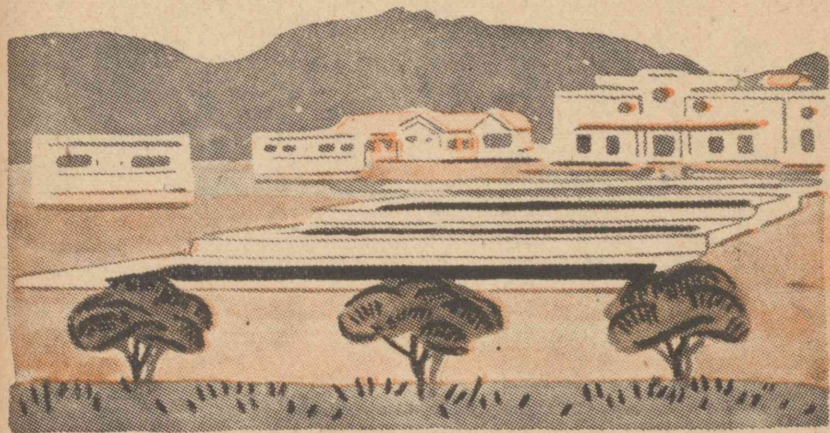
「わたしは、水道の方へ、先に行った方がいいと思います。どうでしょうか。」

と、出かける前に、いいんの、あけみさんがいいました。

「ぼくは、グラウンドの方から、じゆんに行った方がいいと思うなあ。」

と、坂井君がいました。

「でも、学校に近い方は、わたしたち、よく知ってるでしょう。グラウンドなら、坂井さんは、とくべつによく知ってるでしょう。水道の方は、わたしたち、よく知らないから、そこからはじめて、そこで、時間をかけるようにした方が、いいんじゃないでしょうか。そういうえば、そうだなあ。ぼくは、どっちでもいいんです。みんな」



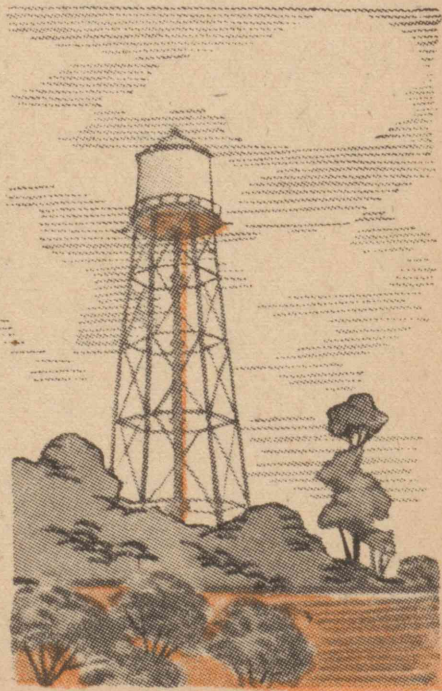
なできめたんなら、ぼくは、どっ
ちにでもさんせいします。
そこで、みんなて話しあいまし
た。水道の方から、先に行った方
がいいという人が多かったので、
そうすることにしました。

水道の浄水場は、三のグループ
の受けもち場所では、いちばん西
のはずれにあります。みんなは、
グラウンドの、よこの道を通って
いきました。水道のタンクが、す

ぐありました。先に、浄水
場へ行くことにしました。浄
水場までは、くわばたけの間
の、細い道を通っていきまし
た。

二 水道を引いてください

浄水場のあるところは、じつは、十日町ではなくて、となりの村
なのです。三のグループの人たちは、だれも、それには、気がつか
ないでいました。



なぜ、十日町の水道の浄水場が、となりの村にあるのでしょうか。それには、こんな話があるのです。

町に、水道を引きたいという話がおこったのは、ずっと前のことでした。そのときは、近くの町でも、高野市のほかには、水道を引いているところはありませんでした。水道を引くには、かなりお金がかかりました。そのためには、町でやることになっている、ほかのしごとをやめにして、そのお金を、水道を引くのに使うか、町の人たちが、そのために、お金を出すか、しなければなりません。町の、たいていの人たちは、どちらにもはんたいでした。

「水道などは、わたしたちには、ぜいたくなものだ。どこの家にも、井戸があつて、べつにふじゆうなことはないではないか。」

という人は、たくさんありました。

「この町の水は、いい水なのだ。」

井戸の水がかれてこまる人は、じぶんのお金を出して、もっと深くほればいいのだ。わたしのうちは、井戸でけっこうだ。」

という人も、たくさんいました。

水道を引く話は、なかなか、まとまりませんでした。

ところが、まもなく、水道を引いてもらいたいという人が、だん



だんにふえてきました。

それは、女の人たちでした。うちで、水をたくさん使うしごとをするのは、女の人たちでした。

「水道が使えるようになれば、どんなに、時間もかからないようになり、力もかけないですむようになるか知れません。わたくしたちは、どんなに少ない時間や力でも、けんやくできればしたいのです。その時間や力を、もっと役にたつことに、使いたいのです。ぜひ、水道を引くようにしてください。」

女の人たちは、こういいました。

男の人たちも、じぶんのうちのことをよく考えてみると、なるほど、その通りでした。はじめははんたいしていた人も、水道を引いた方がいよいよようになりました。

三 みんなの川

水道を引くお金は、みんなが出そうということになりました。

ところが、また、もんだいがおこりました。水道を引くには、水をためてきれいにし、しょうどくをする浄水場がいります。また、その水を家々におくりこむタンクがいります。それには、広戸川の水を引いて、それを浄水場にいれなければなりません。ところが、いいとりいれ口が、十日町にはないので、となり村のところが、いちばんいい、とりいれ口になるということがわかりました。

となり村の地所に、町の浄水場を作らせてもらうことができるか

どうか。

また、下流の土地にすんでいる人たちが、さんせいしてくれるかどうか。

町の人たちが、しんぱいしたのは、広戸川の水は、広戸川の流れる近くの村々にとっては、何よりたいせつな水だということでした。どこの田にも、広戸川の水はひつようでした。

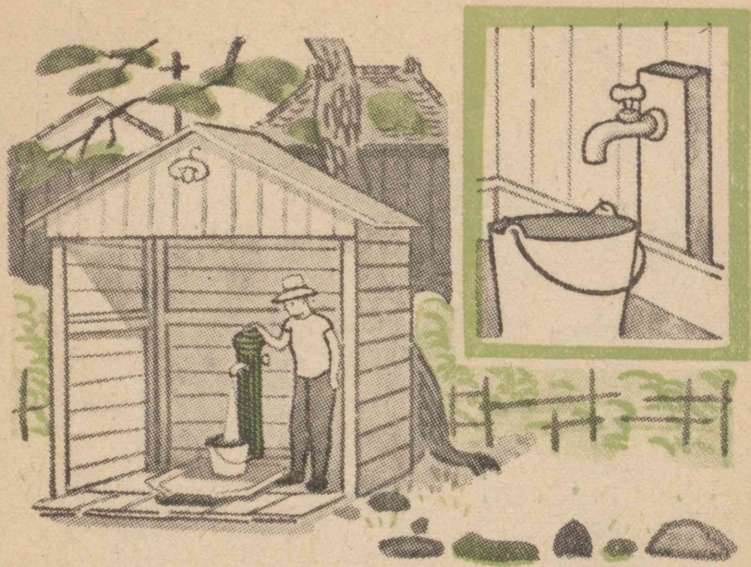
となり村の人たちは、そのそうだんをうけて、すぐ話しあいました。そして、十日町に、つぎのようなへんじをしました。

「十日町の人たちが、今までよりも、もっといいくらしかたができるのならば、これほど、けっこうなことはありません。どうぞ、いい場所をえらんで、使ってください。」

下流の村々からは、つぎのようなへんじをしてきました。

「広戸川の水は、わたくしたちだけの水ではありません。十日町で、水道のために水を使っても、それは、けっして、わたくしたちのごとのじゃまにはなりません。」

こうして、十日町の水道のしごとは、すぐに、はじめられました。となり村には、りっぱな浄水場ができました。くわばたけの間に、遠くか

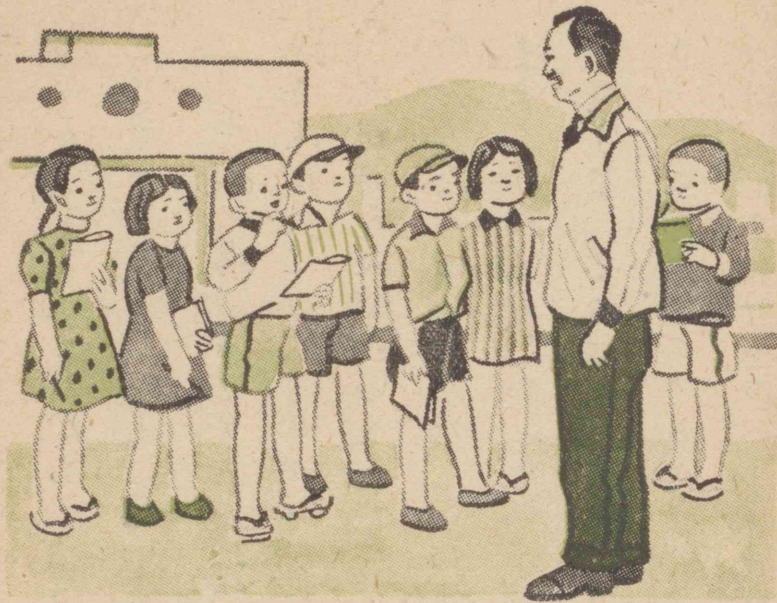


らでも見える、大きなタンクがすえられました。土をほって、鉄か
んが、どンドン、うめられていきました。町の家々のだいどころに
は、ぴかぴか光るじゃ口が、とりつけられました。
そして、用があるときは、いつでも、せんをひねりさえすれば、
わるいばいきんのはいつていない、すきとおった水が、いきおいよ
く、出てきました。

四 みんなのしあわせ

「みなさんも、知っているでしょうね。十日町に、でんせん病の少
いことは。」

と、水道部の人、水道のできるまでの話がおわると、三のグルー



プの子どもたちにもわかって、こ
ういきました。

「それは、なぜでしょうか。」

「水道のおかげです。」

と、坂井君がいきました。

「下水がよくできていることもそ
うです。町のえいせいの人たち
が、よくはたらいてくださるこ
とも、そうだと思います。」

と、あけみさんがいきました。

「そうですね、その通りです。考

えてみると、水道は、町の人たちのために、ずいぶん、役にたっているのです。それから、もう一つ、今のお話には、たいせつなことがあると、わたしは思います。なんだかわかりますか？」

みんなは、顔を見あわせて、しばらく、だまっていた。

「わたしは、こう思うのですが、どうでしょうか。」

と、水道部の人はいいました。

「町の人たちは、みんな、いい、正しいくらしをしようと思っ
ています。けれども、めいめいが、じぶんだけ、いいくらしをしよう
と思うと、それはできなくなります。町の人たちは、ひとりひと
り、じぶんだけでくらししているわけではありません。じぶんひとり
だけ、しあわせを受けることは、できません。町の人たちみんな

が、しあわせになることが、ほんとうのしあわせです。水道のこ
とがあつてから、町の人たちは、みんなのしあわせということをも、
まず考えるようになりました。わたしもそのひとりです。」

ここで、水道部の方は、話をきりました。

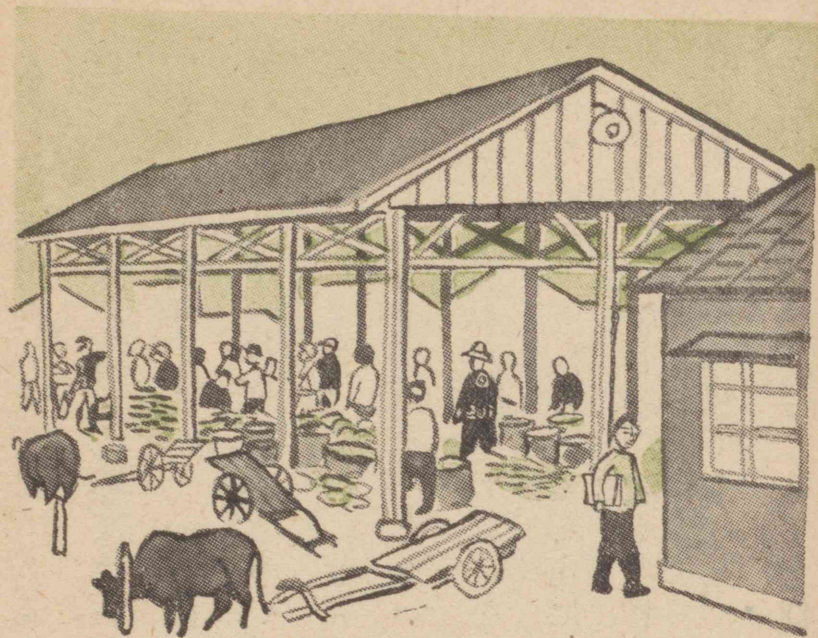
それから、つぎのようにいいました。

じつは、この町の水道の話は、今の助役さんが、いちばんよく知
っているのです。そのとき、いちばんほねをおったのは、林さん
でしたから。そして、林さんは、今の町長の高山さんから、ねっ
しんに、水道のことを、すすめられたということです。こんど、
みんなて、助役さんに、その話をきかせていただきなさい。」

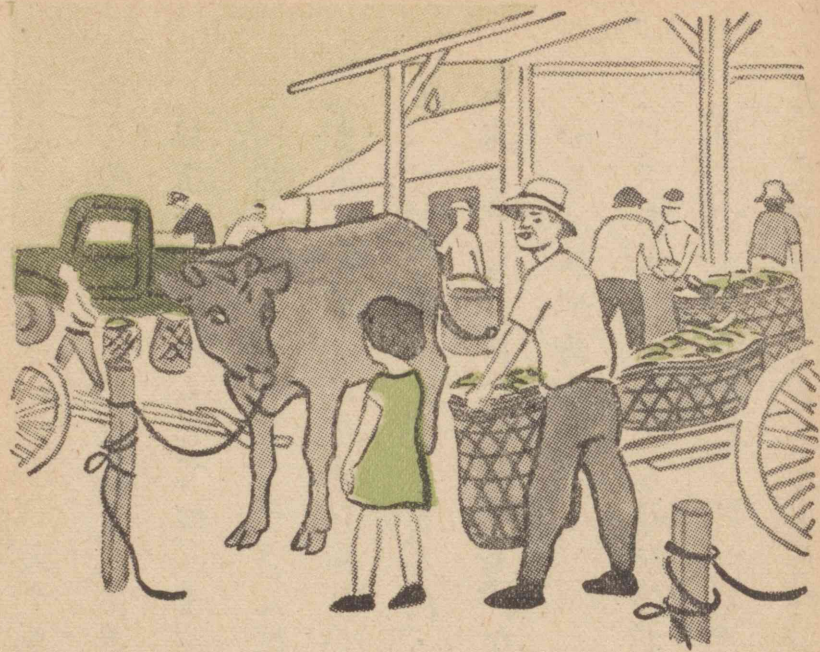
一 青物いちば

四のグループの受けもち場所には、しょくぎょうあんてい所、ほけん所、公園、高等学校、国立りょうよう所などがあります。青物いちばも、ここにありません。

とし子さんのうちは、青物いちばのなかにあつて、青物いちばのしごとをしています。青物いちばも、魚いちばと同じように、まい朝、町のやお屋さんたちがあつまつてきて、野菜や、くだものを買います。町のやお屋さんのお店さきにある、野菜や、くだものは、青物いちばから買つてくるのです。



くだものは、遠くからくるものが、かなりあります。りんごは、北の、さむいところからきます。みかんは、南の、あたたかいところからきます。はこづめにされたりんごや、みかんは、汽車につまられて、駅に送られてくるのです。駅からは、少いときはリヤカーではこぶこもありませんが、たいていは、トラックではこびます。はこの上には、りんごや、みか



んのえのついた、紙がはってあるので、すぐわかります。その紙には、りんごや、みかんでできたところも、かいてあります。あかい、つやつやしたりんごが、いっぱいになっているところは、どんなにきれいなことでしょう。みどりいろの葉の間に、こがねのようなみかんがなっているところは、どんなにきれいなことでしょう。

とし子さんは、時々、そういうことを考えます。そして、もし、そこに、じぶんと同じくらいな女の子がいて、お手紙をあげたり、いただいたりしたら、どんなにたのしいことだろうと思うのです。

ぶどうや、なしは、近くの村からもきます。ぶどうは、町のすぐとなりの、たから村でも、たくさん作っています。ぶどうは、いとこの、はつ子さんのうちでも作っています。

二「あきら」号

野菜は、たいてい近くの村々からきます。少いときは、リヤカーで、すこし多いときは、牛車で、もつと多いときは、トラックで、はこばれてきます。はつ子さんのうちの、「あきらさん」も、だいたいなはたらきてです。「あきらさん」は、ちやいろのおとなしい牛です。とし子さんは、のんきそうな顔を

した「あきらさん」が、大すきなのです。

このあいだ、しばらく、「あきらさん」のこないときがありました。

「おなかをわるくしてね。まだ、ほんとうに、直らないのだよ。」

と、おじさんが、とし子さんにおしえてくれました。

「まあ、牛も、おなかをわるくすることがあるんですか。」

と、とし子さんはききました。

「あるとも、おなかだけじゃない。ほかにも、いろいろな病気にかかるときがあるよ。」

「じゃあ、おくすりものむんですか。」

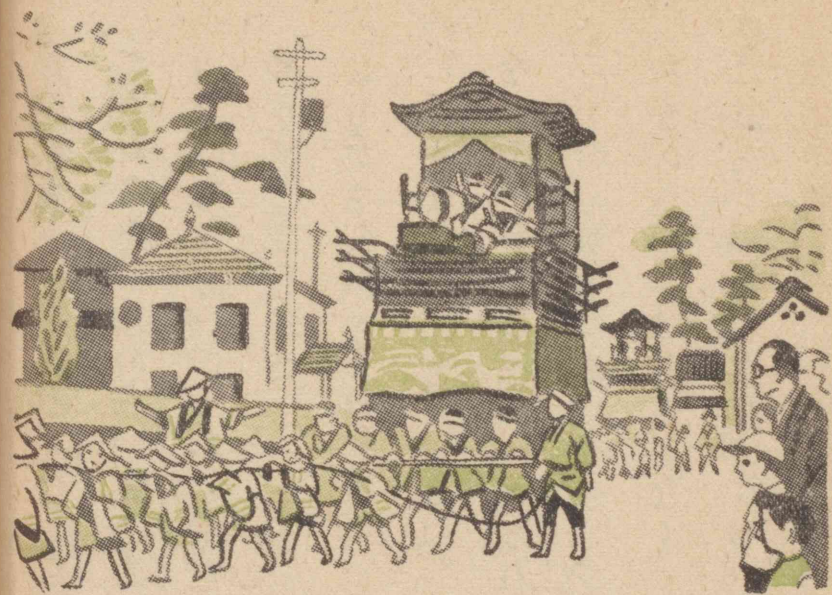
「おくすりものむし、おいしゃさんにもかかるよ。」

と、おじさんはこたえました。

「あきらも、うちでは、なかなか、はたらきてだからね。車も引いてくれるし、田の手つだいもしてくれるし、カしごとでは、人間以上にはたらいてくれるのだから、早く直ってくれないと、ほんとうにこまるのさ。」

とし子さんは、それから二、三日たつて、「あきらさん」のおみまに行きました。そのときは、「あきらさん」は、もう、だいぶんよくなつて、草をたべていました。けれども、とし子さんは、「あきらさん」が、前よりもやせて、つやもわるいようだと思いました。

「あきらさん」は、まもなく、すっかりよくなつて、今では、げんきにはたらいています。



三 秋のおまつり

「ことしは、あきらに、やたいを引いてもらおう。」

ど、とし子さんのおとうさんはいつています。やたいというのは、

秋のおまつりのやたいのことです。

おまつりのときには、町には、

三つか四つのやたいが、出ます。

やたいには、にんぎょうをかぎつ

たのもあります。おめんをかぶつ

ておどるのも、しばいをやるのもあります。町の人たちは、一年に一どのおまつりですから、おどなも子どもも、みんな、たのしくあそぶのです。

近くの村の人たちも、ちょうど、とりいれがおわったあとなので、あちらからも、こちらからも、町のおまつりを見にきます。心のうきたつようなたいこの音が、朝早くから、町中ちやうにひびきわたります。いろいろなおもちや屋さんが、あちこちからやってきて、店をひらきます。

村の人たちは、町にしんるいがある人は、そこへ行って、ごちそうになります。ふだんは、時間がなくて、ゆっくり話のできなかつた人たちが、このときは、心からうちとけあって、話しあうのです。

子どもたちのたのしみは、お正月と、秋のおまつりです。どちらが、すきですかときかれたら、きつとこまるでしょう。お正月はさむいから、おまつりがすきだという人もいるかもしれませんが、おぞうにがたべられるから、お正月がすきだという人も、いるかも知れません。

町には、いろいろ、あそんだり、たのじんだりするものがあります。公園もあります。えいがかんもあります。グラウンドもあり、子どもをあそびばもあります。川でもあそべますし、すこし足のじょうぶな人は、山の方へ、きのことりに行くのも、たのしみです。けれども、町中の人たちがいつしよにたのしむのは、お正月と、秋のおまつりです。

とし子さんのおとうさんは、ことしのおまつりのせわにんなので、「あきらさん」に、やたいを引いてもらおうといたしました。「あきらさん」は、きつと、よろこんで、村から出てきてくれることですよ。

四 たから村のさかい

とし子さんたちは、公園のうしろを通って、りょうよう所の前へ出るさか道を、のぼっていきました。

とちゅうで、たから村とのさかいは、どこだろうということが、みんなのもんだいになりました。さか道をのぼりきつた、りょうよう所の門の前どころが、そうだというものもいます。もうすこし

さきの、ふたつ池のそばのところか、そうだというものもいます。

とし子さんは、時々、いとこのはつ子さんのうちへ行きます。そのときは、わかつているようでしたが、どこからたから村になるのか、よく考えてみると、はっきりわかりません。りょうよう所の、門のところまでは、ひろい道です。そこからさきは、きゅうに、せまくなっています。そう思うと、そこが、さかいのような気もします。ところが、ふたつ池のそばのところから、両がわが、田になっています。そう考えると、そこが、さかいのようにも思われてきます。

「地ずをうつしてくればよかったね。」

と、原田君がいいました。

「ほんとうね。こんど、うつしましょうね。」

と、とし子さんがいいました。

「みんながほしいんだから、いんさつした地ずができれば、いいんだがな。」

と、原田君がいいました。

原田君のにいさんは、山のぼりがすきで、時々、出かけます。にいさんの持っている地ずを、原田君は、時々、見せてもらいます。それは、ほんとうの大きさを、うんと小さくちぢめたものです。にいさんは、通った道を赤えんぴつでそめたり、地名にぼりを引いたりしています。

「ぼくなら、」



と、原田君は、にさんの地ずを
見るときに考えるのです。

「ぼくなら、もつときれいに、色
をぬるんだがな。田や畑のどこ
ろは、みどり色に、山のところ
はちや色に、川や海は青に。」

原田君は、だから、町の地ずが
ほしかったのです。

みんなは、りょうよう所のどこ
ろまできました。

「わかった、わかった。」

と、さきにいた、わか林君がいました。

「きてごらんよ。この石が、さかいのしるしだよ。」

みんなは、さかいのしるしのところへ、かけていきました。

「ほんとうね。どうして、今まで、気がつかないでいたんでしょう。」

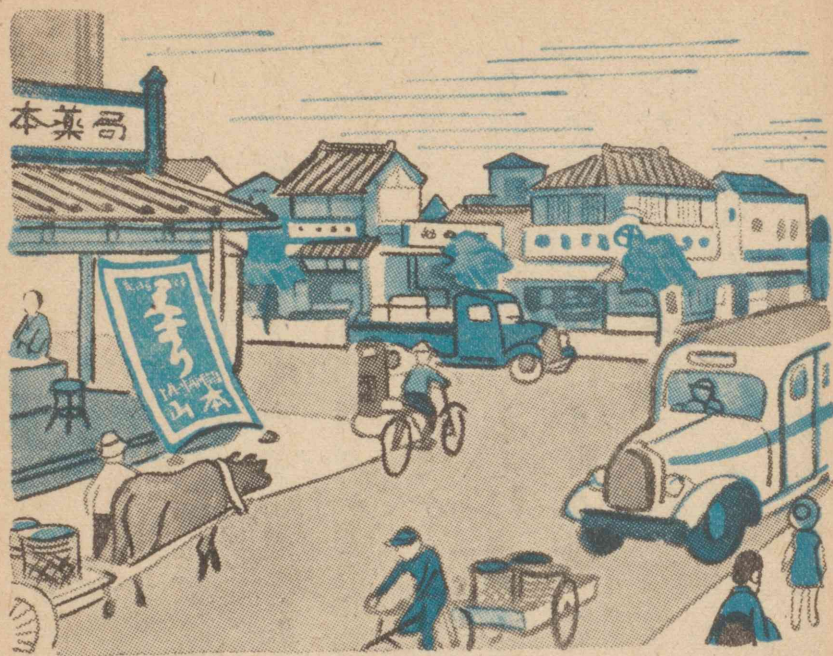
と、とし子さんは、ふしぎそうに、いきました。

そこからは、たから村の田が、すっかり、見わたされました。い
ねは、もう、青々とのびていました。すずしい風が、そこを通って
きて、みんなの、あせばんだ顔に、ふいてきました。

一本町かど

五のグループの受けもち場所には、しょうぼうしよ、さいばん所、農業高等学校などがあります。

五のグループのしげるさんのうちは、町中でいちばんにぎやかな本町かどにある、ざっかてんです。しげるさんのうちのむかひに、ぼたん園のせわをしている、くすりやさんの、山本さんのうちがあります。本町かどは、南北に通っている国道と、東西に通っている県道とが、まじわるところです。朝からばんまで、人がにぎやかに通ります。じてん車が、ひっきりなしに通ります。牛車が通ります。



バス、トラック、それに、ふつうのじどう車も、時々通ります。県道は、ここから東へ行くと、ぼたん園を通って、大川のたきに出ます。大川のたきは、平地にあるたきでは、めずらしく大きなたきです。大川の水が多いときは、ずいぶん、りっぱです。この道は、たきをすぎて、石山という町を通ります。バスは、十日町からここまで行っているのです。本町かど

から、県道を西へむかつて行くバスは、大沼おほなまという町まで、行って
います。

こういう町々は、べんりなりのりものなかつたむかしは、それぞ
れ、旅人のとまる所として、たいせつなやくめをしていました。ま
た、そのまわりの村々からは、ここへ、米やむぎや野菜などが集ま
りました。また、ここから、村の人々は、じぶんたちの手では作れ
ない、いろいろくらしにいりような品ものを、買ってかえりました。
ですから、こういう町々は、そのころは、それぞれ、その地方の中
心だったのです。

ところが、今は、ようすがかわりました。もちろん、今でも、中
心といえないことはありませんが、むかしのような、にぎやかさは
なくなりました。どうしてでしょう。それは、のりものが、べんり
になったからです。手紙や、てんぼうのように、安くて、時間のか
からないものが、使われるようになったからです。

今では、十日町の方に、にぎやかさが集まってきたというこ
とができます。十日町へ汽車でやってきて、バスで石山へ行き、用
がすんでから、またバスで大沼へ行き、うまく時間を使えば、一日
で、三か所の用をすましてしまうこともできるのです。

二 高野市

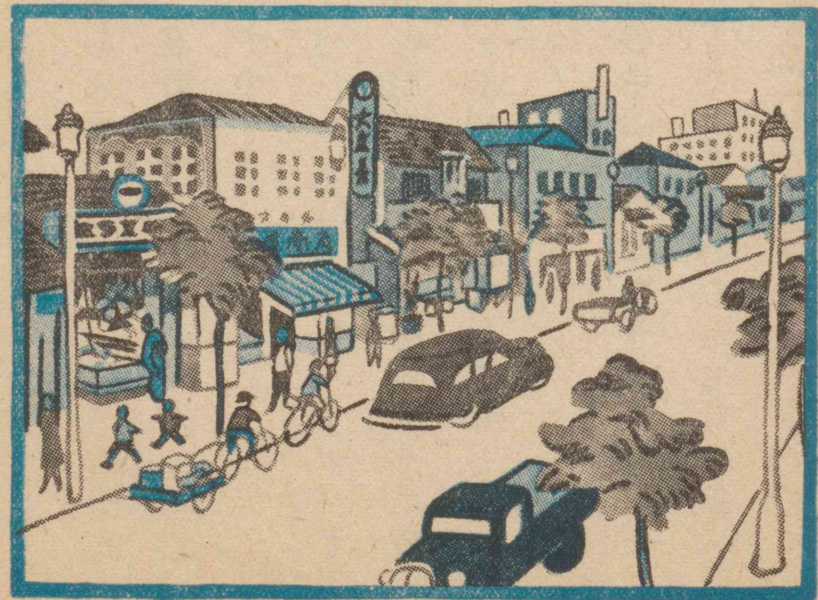
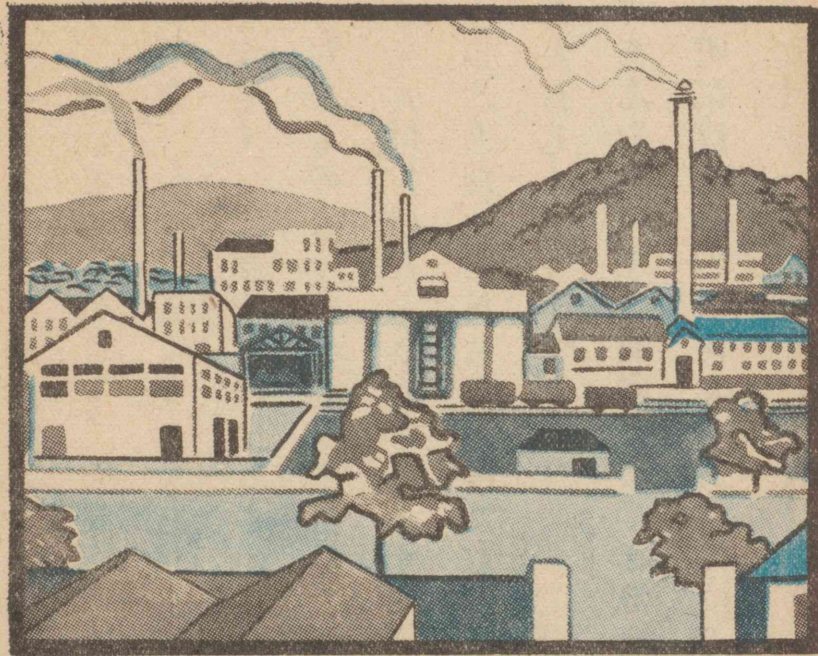
国道を、南にむかつていくバスは、高野市まで行っていきます。

高野市は、十日町を通過して北へむかう鉄道と、東の海岸と西の海

岸をつなぐ、鉄道のまじわるところです。鉄道ができる前も、これと同じように、東西に通る道と、南北に通る道とは、ここでまじわっていました。

高野市の人たちが、むかしから、いろいろなあきないを、さかんにやってきたのは、高野市がそういう、べんりなところにあつたからだと、いうことができます。十日町の商人は、たいてい、高野市の商人と取引がありました。高野市の問屋から、品ものを買うということが多いのです。

鉄道がしかれ、交通がべんりになると、高野市には、いろいろな工場が、たつようになりました。工場で使う原料をしいれるのにもできあがった品ものを送るのにも、高野市は、べんりだったからです。



そうになると、工場ではたらく人が、たくさん高野市へやってきます。遠いところからきて、高野市にすむ人もあり、近いところから高野市へかよってくる人もあります。高野市は、こういう人たちで、ますます、にぎやかになるといいうわけです。

たてもものも、むかしのままのでは、はたらきにくくなります。できただけ、はたらきやすいように、からだをわるくしないようにとくふうした、あたらしいたてもものが、どんどんできてきます。道もあたらしくなります。

そんなわけで、高野市は、この地方の中心都市になりました。十日町には、村の人たちをあいてにして、くらしている人たちが多いのですが、高野市では、そういう人たちは、だんだん少なくなっています。

十日町から、バスにのっていくと、すぐ町はずれに、まつなみ木があります。それは、いかにも、むかしのことを思わせるような、ゆったりした、大きな、まつなみ木です。

ところが、バスが高野市にはいると、まるで、気分がかわってしまいます。「なんといい、めまぐるしさだろう。だれでも、そう思わずにはいられないのです。」

三 こまっ た道

しげるさんのうちで、こまることといえ、それはほこりが多いということでした。十日町の土は、かるいせいか、かわくと、すぐ



でした。

また、雨がふると、こういう土は、すぐにおしるこのように、どろどろになります。このどろんこの道は、ほこりよりも、もっと、通る人たちをこまらせました。バスや、トラックがしきりに通るようになってからは、なおさらでした。道のあちこちに、大きなくぼ

に、とびやすいのです。しげるさんのうちは、ひどい方でしたが、通りの店は、みんな、このほこりには、こまっていたいました。店やだけてなく、通る人たちも、みんなほこりのひどいには、大こまり

みができて、そこに水がたまり、バスやトラックが通るたびに、ものすごいどろがはねました。

駅に近い通りだけは、どうやら、コンクリートでかためましたがほかの方へは、なかなか、手がまわらないので、みんなは、いつもこまっていたいました。

ある日、朝早く、四、五人の大きな子どもたちが、この通りのくぼみをうめていました。子どもたちは、リヤカーで土をはこんできて、スコップでくぼみをうめ、上から、ふみかためていました。二、





三日たってから、通りかかったおまわりさんが、どうして、そんなことをしているのかとたずねました。

「ぼくたちは、道をよくしてあげたいんです。」

と、子どもたちは、口々にこたえました。

「ぼくたちは、あけぼのりようにすんでいるんです。町の人たちは、遠くからきたぼくたちのために、あけぼのりようをたててくれました。ぼくたちは、ぼくたちでできることなら、町の人たちのためになることをしたいと考えました。道がすこしでもよくなったら、きつと、町の人たちはよろこんでくれるでしょう。」

ところが、そうやって、子どもたちがせつかく直してくれても、

道は、バスやトラックが通るたび、雨がふるたびに、あとからあとから、こわれていきました。まるで、子どもたちのしごとが、役にもたたない、ばかなしごとでもあるかのように。

四 みんなで直す

ところが、子どもたちのかずはだんだんふえてきました。それまでは、きまつたくぼみだけしか、うめることができなかったのに、もつと、ほかのくぼみも、うめら

れていくようになりました。

いちばんはじめに、これをもんだいにしたのは、バスやトラックのうんてんしゅさんたちでした。

「どうも、こまったね。わたしたちは、道を通るのが、このごろ、はずかしくって、しようがない。」

みんなは、どうしたらいいかとそうだんしました。そして、じぶんたちもお金を出して、道をよくするようにしようと、きめました。バスの会社や、トラックを使う会社や組合は、うんてんしゅさんたちの話をきいて、もっともなことだと思いました。みんな、そのために、できるだけのお金を出そうといたしました。

そうになると、ほかからも、お金を出そうという人が、出てきました。しまいには、町中の人たちが、お金を出そうということになりました。こうして、国道は、町の人たちによって、あたらしい道になりました。

ひとりの、うんてんしゅさんは、あたらしくできたコンクリートの道を、さもゆかいそうに、バスを走らせながら、ひとりごとをいきました。

「まったく、子どもたちには、かなわないな。おれも、もうすこし、しっかりしないといけないぞ。」

五 友だち

五のグループの子どもたちは、まつなみ木の草の上にすわって、

やすみました。ひるすぎの日の光は、まつの葉の間から、みんなの上
にさしてきました。汽車が、ポーツときてきをならして、通って
いきました。それを見ていたしげるさんが、まゆみさんにむかって、
いいました。

「まゆみさんは、もうじき、東京へいくんだね。」

「ええ、そうよ。」

と、まゆみさんはこたえました。

まゆみさんのおとうさんは、こんど、つとめがかわって、東京へ
行くことになったのです。

「まゆみさんはいいなあ。ずいぶん、汽車にのれて。」

と、白石君がいました。

「でも、わたくしは、汽車にのっ
ても、そんなにうれしいとは思
わないの。」

と、まゆみさんはこたえました。

「どうしてさ。」

と、白石君が、また、ききました。

「どうして、うれしくないのさ。」

「それは東京には、もつといいの
りものがたくさんあるもの。国
電^{でん}だって、地下鉄^{ちかてつ}だってあるし、
バス^{バス}だって、ここよりはりっ





「おはよう。」
 どでもいうように、まず、もけいのそばへ行って、にこにこしまし

「ばだもの。」

と、しげるさんがいいました。

「ねえ、まゆみさん、そうだね。」

「いいえ、そうじゃないんです。」

と、まゆみさんはこたえました。

「わたくしは、みんなとなかよしになることがうれしいんです。どんなに気もちのいいのりものにも、どんなにおいしいものをたべても、わたくしは、お友だちのことを思いたすんです。お友だちといっしょなら、わたくしは、ほんとうに、うれしいと思うんです。」

8

三年生のお話

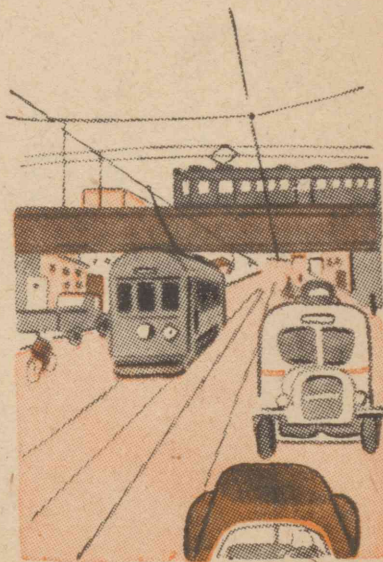
一 もけいができた

「いよいよ、町のもけいができあがりしました。思わず見とれるくらいに、よくできました。まい朝、きょうしつへはいると、子どもたち

ちは、

「おはよう。」

どでもいうように、まず、もけい



た。

野見先生の組のも、杉山先生の組のも、できあがりしました。

三つのもけいは、一つは学校へのこしておき、ほかの二つは役場ととしよかんに送られるのです。役場からは町長さん、としよかからはかん長さんがきて、くじを引いてくださることになりました。

「そこで、先生がたは、こういうふうにしたらどうだろうかと、そうだんをしました。」

と、小村先生がいました。

「三人のかたがわざわざきてくださるのですから、くじびきの会だけでなく、もつと、いいことを考えたいというのです。どうでしょうか。」

「先生、それがいいです。」

と、みんなが、いいました。

「それでは、どういふことをしましょうかね。何か、いい考えか、ありますか。」

「先生。」

と、はじめさんがいいました。

「ぼくたちの一のグループでは、こんなことをしたいと話しあっていたのですが、どうでしょうか。それは、五つのグループが集まって、それぞれ、いちばん感じたこと、しらべたこと、けんきゅうしたことを話しあうのです。そこで、いちばんいいとみんなが思ったことを、話したらいいと思います。」

「今の一のグループの考えはどうでしょう。なかなかよさそうですね。」
みんな、それがいいと思いました。
ほかの組でも、ほうこく書しよを作して、それを、お話することになりました。



二 小村学級がくきゅうの話

わたくしたちは、こんどのもけいを作るのに、ずいぶんおもしろいことや、ためになることや、ふしぎなことや、感心したことにてあいました。また、いろいろなことを、見たり、きいたり、よんだりしました。そして、こんなに、おもしろく、べんきょうのできたことを、ほんとうに、うれしく思っています。

わたくしたちが、感じたことは、三つあります。
第一は、町の人たちが、おたがいにたすけあい、力をあわせて、町をすみよくしようと、つとめていることです。じぶんだけがよくなるうとする考えは、だれにでもあるものかも知れませんが、それは、みんなのためによくしようと考えるには、かなわないのです。町がいい町になったとき、はじめで、じぶんもよくなるのだということですよ。

第二は、町だけがよくなるうとしても、ほかの町や、村がよくなるなければ、ほんとうに、よくはなれないということです。町の人

たちは、おたがいどうじ、たすけあい、力をあわせてしごとをしますが、それだけではありません。近くの村や、遠い村や、もつと遠いところの人たちの力にも、たすけられているのです。

第三は、ものをたいせつにしなればならないということです。きものでも、たべるものでも、たてもものでも、道でも、なんでも、みんなそうです。それを作るのにも、はこぶのにも、どんなに、人の力を使っているかわかりません。わたくしたちが、いいくらしかたをし、いい人になるためには、どうしても、いいものがいりようです。ふだんは気がつかないような、ちよつとしたものでも、わたくしたちにたいせつなものは、たくさんあります。わたくしたちは、これからも、うっかりして、ものをそまつに考えたり、あつかったりしないように、よく考えたいと思います。

わたくしたちは、わたくしたちをたいせつにしてくださる町の人たちのために、わたくしたちの作ったもけいが、すこしでも役にたてていただけたならば、どんなにうれしいことでしょう。

三 野見学級の話



わたくしたちは、道と、のりものについて、感じました。そのお

話をします。

わたくしたちは、ふだん、なんの気なしに、道というものは、人があるからあるのだ、というぐらいにしか、考えていませんでし

た。まるで、考えない人もいました。

けれども、道がなかったらどうでしょう。わたくしたちは、すぐこまっけてしまいます。道のないところに、はじめて道を作った人たちは、ずいぶんたいへんだったことでしょう。道をどこへ作るかということをきめるのにも、よく考えなければならなかったらうと思ひます。作ることがきまっても、それから、ずいぶん力をかけ、時間をかけなければならなかったでしょう。そういう人たちのことを考えると、わたくしたちは、ほんとうにありがたいと思ひます。のりものでも同じです。わたくしたちは汽車にのつたとすると、おもしろい、ゆかいたという方に、気をとられてしまいます。じてん車を見ても、ほしいなど思つたり、のりたいなど思ふ方に、気をとられてしまいます。

どんなのりものでも、それをはじめて作った人は、えらい人だと思ひます。頭かまがよくて、ねっしんな人だつたと思ひます。わたくしたちが、そのことに気がつかないでいたり、気がついて、すぐわすれたりするのは、いけないことだと思ひます。

道は、人がいつたりきたりするため、またものをはこぶためにあります。いろいろなのりものも、人がのつたり、ものをつんではこんだりするためあります。わたくしたちがくらししていくのに、どうしても、なくてはなりません。

いい道ができ、いいのりものができ、みんながそれを使えるようになれば、ほんとうにいいのです。みんながたすけあい、力をあわ

せていくには、いい道、いいのりものがひつようです。



四 杉山学級の話

わたくしたちは、動物と植物について考えました。

わたくしたちがたべるものは、たいていは、動物と植物です。米、むぎ、まめ類、野菜、くだもの、海草など、みんな植物です。魚、牛やぶた、にわとり、たまごなど、みんな動物です。きるものもそうです。もめん、あさ、わたなどは植物から、きぬ、毛糸などは動物からとります。わたくしたちがすんでいる家も、たいていは、植物で作ってあります。

また、牛や馬などのように、人間のしごとをてつだってくれる動物もありますし、とんぼや、小鳥などのように、わるい虫をたいじて、人間のためになることをしてくれる動物もあります。

色のきれいな鳥や、なきごえのきれいな鳥は、わたくしたちをたのしませてくれます。きれいな花も、わたくしたちをたのしませてくれます。

もっとよく考えてみれば、きっと、もっとたくさん動物や、植物が、わたしたちの生活とむすびついていて、いると思います。

こういう動物や、植物の使いかたは、長い間に、だんだん、よくなってきたのだと思います。そして、これからも、使いかたをくふうして、うまくしていかなければならないと思います。それには、

動物や植物のことについて、よく知らなければなりません。また、それだけ知っていても、たりないのです。

わたくしたちは、うんとべんきょうをしたいと思います。うんとべんきょうをして、それを、みんなのために、使いたいと思います。わたくしたちは、学校としよかんを、作っていたきました。べんきょうをする本がたくさんよめるようになって、ほんとうにありがたいと思います。

けれども、もう一つおねがいがあります。わたくしたちに、えいが見せてください。わたくしたちが、もつとべんきょうができるように、わたくしたち子どもたちのために、子どもへのえいを見せてください。

○しらべましょう

一 花について

あなたがたは、どんな花が好きですか。

あなたがたの町(村)には、花の名所がありますか。

あなたがたの知っている、きれいな花には、どんなものがありますか。

くすりになる、草や、木を知っていますか。それについて、みんなで話しあいましょう。

二 クラス会について

あなたがたは、クラス会(自治会)を作っていますか。

それは、どんなしくみになっていますか。どんなしごとをしていますか。

クラス会(自治会)を、よくしていくには、どうしたらいいか、みんな考えて、話しあいましょう。

三 もけいについて

あなたがたは、じぶんで、もけいを作ったことがありますか。

それは、どんなもけいでしたか。

あなたがたは、みんなで、もけいを作っ

たことがありますか。

それは、どんなもけいで、どんなふうにして、作りましたか。

四 駅について

あなたがたの町(村)には、駅がありますか。

駅には、どんな人々が、はたらいていますか。

駅には、どんな人々が、ではいりしていますか。

駅のしくみについて、話しあいましょう。

していますか。

六 トラックについて

トラックを知っているでしょう。トラックは、どんなものをはこぶでしょう。

ものをはこぶのには、トラックのほかに、どんなものが使われているでしょう。

じてん車にのれますか。

じてん車について、どんなちゆういが、いりますか。

のりものには、どんなものがあるでしょう。

また、駅の役目について、話しあいましょう。

四三ページにある、駅のさしえについて、話しあいましょう。

五 魚について

あなたがたは、どんな魚を、たべていますか。

それは、きせつ(春夏秋冬)によつてちがいますか。

その魚は、どこからはこばれてくるでしょう。

それをはこぶのには、どんなやりかたを

それは、どんな役にたっているでしょう。

七 米そのほかについて

あなたがたは、一日に、どのくらいのお米をたべていますか。

そのお米は、どこからくるか、どこで作っているか、知っていますか。

お米のかわりに、どんなものをたべますか。

あなたがたは、どんな野菜や、くだものをたべていますか。きせつによつて、どんなものを食べるか、考えてみましょう。

野菜や、くだものが、どこからくるか、

知っていますか。また、どんな人が、どんなもので、はこんでくるか、知っていますか。

あなたがたのたべものには、どんなものがあるか、みんな、話しあいましょう。

また、それが、どこからくるか、どこで作られているかについて、話しあいましょう。

たべものの、すききらいについて、みんな、話しあいましょう。

八 道について

んな道か、みんな、話しあいましょう。

九 町(村)の人々について

あなたのうちの人々は、どんなしごとをしていますか。あなたのうちでは、どんなしごとをして、くらしをたてていますか。

あなたの友だちのうちでは、どんなしごとをして、くらしをたてていますか。

あなたがたの町(村)の人々は、どんなしごとをして、くらしをたてていますか。

あなたがたの町(村)で、いちばんたくさんの人々がくらしをたてているのは、どんなしごとですか。

あなたがたの町(村)で、いちばんにぎやかなのは、どの道ですか。また、さびしいのは、どの道ですか。

にぎやかなのは、どういうわけか、わかりますか。さびしいのは、どういうわけか、わかりますか。

いちばん広いのは、どの道ですか。

せまいのは、どんな道ですか。

どんな人たちが、通りますか。

どういうのりものが、通りますか。

道が、どんな役にたっているか、みんな、話しあいましょう。

いい道とはどんな道か、わるい道とはどんなしごとは、どんなふうにして、はこばれていますか。

そのしごとをするには、どんなものがいりようですか。また、どんな人がいりようですか。どんなことが、いりようですか。

そのしごとが、うまくはこばれていくには、どんなことがひつようか、みんな、話しあいましょう。

あなたがたの町(村)には、どんなしごとをするところがあるか、みんな話しあいましょう。また、そのしごとをするところ

のうがっこう……41	ほいくしょ……10,54	むし……127
のうぎょうこうとう	ほうこくしょ……120	むらざかい……95
がっこう……41,100	ぼうはてい……66	めんじょう
ノート……38	ほけんしょ……10,86	(うんてんしゅの)……59
のりもの……103,123	ほこり……107	もとまちかど……100
	ほしうお……37	もけい……34,117
はいきゅう……28	ぼたんえん……4,48	もめん……126
ばいきん……82	ぼたんえん(さしえ)……6	もんだい……95
はくさい……44	ほんどおり……5	やおや……86
はこづめ……87		やくば……27,118
はし(橋)……5,40,69	まちのおまつり(さしえ)……92	やくばのしごと……28
バス……5,41,48,101		やくば(さしえ)……29
はつどうき……67	まちのちず(さしえ)……36,37	やさい……44,86,102,126
はな(花)……6,13,127		やたい……92
はなしあい……34	まちやくば……11,27,34,72	やどや……41
はんじょう……46	まちやくば(さしえ)……13	
	まつなみき……5,107,113	ゆうびんきょく……30,54
びょうき……90	まつり……92	よてい……38
びょういん……31,54	まめ……126	
ひろとがわ……5,34,79	まゆ……50	
		リヤカー……87,89,109
ぶた……126	みかん……87	りょうようしょ……95
ふたつつけ……95	みせ……54	りんご……87
ぶどう……88	みち……6,123	
ふね……66	みなと……66	わた……126
ヘッドライト……60	むぎ……40,102,126	

ろが、あなたがたの町(村)の人々に、どんな役にたっているか、みんなで、話しあいましょう。

十 小村学級について

この本の中で、三年生は、もけいができあがったとき、そのほうこくをしました。

あなたがたは、小村学級の話を、どう思いますか。

かんしんしたことが、ありますか。

わからないことが、ありますか。
おなじことを、考えましたか。
ちがうことを、考えましたか。
それについて、みんなで考えて、話しあいましょう。

ほかの、杉山学級、野見学級の話についても、それぞれ、考えましょう。
そしてみんなで、話しあいましょう。

..5,44,48,56,114 けんりょう.....104 しあわせ.....84
 きぬ.....126 しおぎけ.....57
 きのことり.....94 こうえん.....72,86,94 じしょ.....79
 キャッチボール.....17 こうじょう.....104 四のグループ.....86
 きょうしつ.....117 こうつう.....104 じてんしゃ.....100,124
 ぎょぎょうくみあい.....65 こうとうがっこう.....86 じどうしゃ.....59,101
 ぎょせん.....67 こうほしゃ.....25 しばい.....93
 ぐじ.....118 こうちょうせんせい.....20 じゃぐち.....82
 ぐじびき.....118 こくでん.....115 しょうがっこう.....11,72
 ぐすり.....7,90 こくどう.....5,35 じょうすいじょう.....
 ぐすりやさん.....7,100 こくりつりょうようしょ.....72,75,79
 くだもの.....86,126 こっかけいさつしょ.....72 じょうすいじょう
 くみあい.....112 こどものとしょかん (さしえ).....74
 グラウンド.....72,94 (さしえ).....23 しょうどく.....79
 くらし.....84 ことり.....127 しょうにん.....104
 グループ.....34 ごぼう.....45 しょうぼうしょ.....10,30
 クレーン.....66 こめ.....40,44,102,126 しょくぎょうあんていしょ.....86
 グローブ.....17 コンクリート.....63,109 しょくぶつ.....126
 クロール.....69 ざい(けたの材).....50 しょうがつ.....94
 くわばたけ.....75 さいばんしょ.....100 しんるい.....93
 けいさつしょ.....10,30 さかな.....54,126 すいさんがいしゃ.....65
 けいと.....126 さかなやさん.....54 すいさんこうとう
 けすい.....83 さかみち.....95 がっこう.....65
 けんきゅう.....22,119 ざっかてん.....100 すいさんしけんじょう
 けんどう(県道).....6 三のグループ.....7264,65

すいしゃ.....40 たべものや.....41 とうきょう.....25,114
 すいしゃごや.....40 たまご.....126 とうけ.....61
 すいどう.....27,72,78 タンク(水道の).....74 とうだい.....67
 すいどうぶ.....82 タンク(さしえ).....75 どうぶつ.....126
 スコップ.....109 たんざん.....66 とうかばし.....5,40
 せいきん.....28 ちかてつ.....115 としょかん.....21,34,118
 せいしこうじょう.....38,50 ちず.....34,96 となりのむら.....76
 せいしこうじょう ちほうけいさつしょ.....54 ともだち.....116
 (さしえ).....51 ちめい.....97 トラック.....54,87,89,101
 せいひょうがいしゃ.....65 ちゅうがっこう.....72 とり.....127
 せき.....40 ちゅうしんとし.....106 とりいれ.....93
 せきたん.....66 ちゅうかいぎちょう79 とりいれぐち(水道の)
 せわにん.....9525,30 とりひき.....104
 せん.....82 ちょうちょう(町長) とんぼ.....127
 せんきょ.....2411,18,24,85 とんや.....104
 せんせい.....25
 つきのはま.....56,65 なし.....88
 だいいちグラウンド.....72 なえぎ.....7
 だいにグラウンド.....72 てがみ.....88,103 なまのさかな.....56
 たかのし(高野市).....5,103 てっかん.....82 二のグループ.....54
 たかのし(さしえ).....105 てつどう.....42,103 にちようひん.....46
 たからむら.....44 でんき.....28 にわとり.....126
 たき.....101 でんきぶ.....40 にんじん.....45
 たてもの.....10,38 でんせんびょう.....82 ねぎ.....45
 たび.....42 でんぼう.....103
 たびびと.....102

社会科編修委員会

坂 西 志 保
 勝 田 守 一
 友 野 代 三
 井 上 越 人
 服 部 直 (本巻執筆担当)
 副 島 民 雄
 宮 下 三 七 男
 挿 画
 白 崎 海 紀
 装 釘
 牛 窪 忠

感謝
 本書の編集にあたっては、各方面各地方多数の方々
 の御協力を得ました。とくに、大石讓、丹治守雄、山崎巳
 代治、吉野正男、塩谷軍児の諸氏には、實際指導の立場
 から、種々の実験、調査、検討をわすらしました。記
 して謝意を表します。

Approved by Ministry of Education (Date Apr. 24, 1950)

小学生の社会 3年上
 十日町の町長さん

昭和25年4月25日印刷
 昭和25年5月5日発行
 (昭和25年 月 日 文部省検定済)

小社303

著 作 者 日本書籍社会科編修委員会
 代 表 者 坂 西 志 保
 発 行 者 日本書籍株式会社
 代 表 者 木 村 淵 之 助
 東 京 都 文 京 区 久 堅 町 108 番 地
 印 刷 者 日本書籍株式会社
 代 表 者 木 村 淵 之 助
 東 京 都 文 京 区 久 堅 町 108 番 地

発行所 東京都文京区 日本書籍株式会社
 久堅町108番地

〒

おもなことば

あおもいのいちば……86	うしぐるま……89,100	おぞうに……94
あおもいのいちば (さしえ)……87	うま……127	おまわりさん……110
あきない……46,104	うみ……61	おみやげみせ……41
あきまつり……92	うんそうや……41	おもちゃや……93
あけばのりょう……110	うんちん……46	おんなのひとたち……78
あそびば……31,72,94	うんてん……57	
アンテナ……65	うんてんしゅ……57,112	かい……68
	えいが……128	かいがん……65,103
いいん……73	えいがかん……31,94	かいこ……50
いし……50,99	えいせい……28	かいしゃ……22,112
いしゃ……90	えき……38,42	かいそう……68,126
いしやま……101	えきとえきのしくみ (さしえ)……43	かくしゃ……22
いちのグループ……34	えきへくるもの、えきか らだすもの(さしえ)……47	かしゃ(貨車)……66
いちば……59	えきのきんじょ(さしえ) ……39	がっこう……31,34
いちりづか……5	……39	がっこうとしゃかん ……21,128
いと……50	いんさつ……97	かぶわけ……8
いど……76	おいしゃさん……90	かりゅう……80
いんさつ……97	おおかわのたき……101	かわら……50,52
	うえはらいしゃ……50	かんちょうさん……118
ういはらいしゃ……50	うおいちば……31,54	おおぬま……102
うおいちば(さしえ)……55	うおいちば(さしえ)……55	きいと……50
うけつけ……14	おか……63	きかい……60
うし……89,126	おかね……12,22,76,112	きしゃ(ざっしの)……11
	おしょうがつ……94	きしゃ(汽車)……

(1)



十日町の町長さん

文庫
50
988

広島大学図書
01 0130449988


日本書籍株式会社